

水俣の歴史的遺構(跡)を残す会

目次

はじめに

- I. 水俣市水俣病関連遺跡群の追記項目
 - II. 水俣市民の思う水俣遺産／水俣遺産サミットの成果
 - III. 江戸期からの水俣市の塩田遺構の考察
- 残された課題
- 参考資料

はじめに

2023 年 12 月に作成した「水俣市水俣病関連遺跡群に関する資料第一集」において、下記の残された課題を提示した。

「水俣市水俣病関連遺跡の資料作成」に関して残された課題

- ①百間樋門・排水口、百間港の過去の様子のわかる写真、地図、文献等の収集。市民の生活排水も流されていたことから、管理責任は当初から行政にもあることになる。市民の生活排水処理を一企業のチッソに頼っていたということになるが、管理の経緯が明確になる資料の入手が必要である。この点は、百間水路～丸島水路においても同様であり、現在江添川、田在川の河川の管理と不可分である。
- ②百間港における百間樋門とその他の排水口の歴史的变化と改築時の資料が必要である。
- ③江戸期における塩づくりの形式の解明と合わせて、百間塘、大廻り塘、潮廻りの機能と構造を明確にする調査が必要である。一部発掘も含めて埋蔵文化財として調査研究が必要である。
- ④丸島樋門の歴史、樋門の大規模な改修の資料。大廻りの塘とその横の遊水地の利用と管理の歴史の資料。
- ⑤チッソの排水処理に関するチッソの保存している工場排水計画に関連する資料が必要である。
- ⑥八幡プール（2 か所、水俣川河口の手前と 1970 年代の埋め立て）の歴史と整備状況の資料
- ⑦チッソのカーバイド関連の廃棄物の埋め立て地の箇所と歴史、現在の汚染度合調査結果資料
- ⑧明治から昭和に至る、耕地整理と農業用排水路、堰に関する資料
- ⑨この水俣市水俣病関連遺跡群第一集の資料には、現在のリストから漏れているものも多々あるので、今後の補充を行う予定であり、かつ、地域計画においても補充していくことが求められる。

上記の課題の内⑨に関しては、水俣市水俣病関連遺産群の項目を I に追記した。

また、水俣市の文化遺産として保存活用すべきものに関して、広く市民の意見を集める活動として 2024 年 4 月 27 日に実施した「水俣遺産サミット」の成果を II にまとめた。

さらに、②、③、④及び⑧に関する追加調査研究（文献調査、現地調査、2023 年 12 月～2024 年 4 月）の成果を「III. 江戸期からの水俣市の塩田遺構の考察」としてまとめた。

I. 水俣市水俣病関連遺跡群の追記項目

第1集で水俣市水俣病関連遺跡群についてのリストを挙げ、それらについて個別の考察をおこなった。一方、その後の調査で、水俣病関連遺跡群として取り上げるべき重要な遺跡は他にも多数あることが判明してきた。そこで第2集では第1集分に追記するかたちで更新されたリストを掲載することとする。なお、このリストは今後も更新されていくものであり、第2集分で完成したわけではない。

表I-1 水俣市水俣病関連遺跡群のリスト

#	項目	収録	遺跡としての意義	課題	地	備考・資料等
1	百間樋門・排水口 (百間塘)・百間港	第1集	水俣で17世紀に最初に干拓開発された塩田（内浜）のための塘として百間塘と四十間塘があり、歴史文化的価値は高い。江戸期の図面には百間塘に二つの樋門が描かれている。樋門は江戸期から塩田のため満潮時には海水の取水機能を果たし、塘は潮止機能も果たした。江戸期の干拓は、塩田と水田の開発であり、海水取水と水田の排水の両機能を果たしていた樋門としての文化財的価値がある。チッソ工場が設置された後樋門は改造されているが、改造前は伝統的な石橋樋門の可能性もある。チッソ工場は排水の安全性も確かめず有機水銀を含む汚染水を昭和7年からたれ流した。ここは、水俣病の原点。当時の排水口の扉は4枚の木製と推察する。水俣病歴史造性の樋門とコンクリート製の足場を備えた埋蔵文化財となる重要な遺跡である。猫400号実験は、この排水を餌に混ぜて行われ水俣病が工場排水に起因することが明らかになった。当時の管理はチッソ労働者がポンプ小屋で管理していた。現在は、この樋門は水俣市が管理している。	江戸期・明治期からの樋門の構造と機能(海水取水と水田排水の2つの機能、と管理主体を明確にする。チッソ工場からの有毒汚水は、は、雨水や生活排水も流されていた田在川に流され、その後樋門の手前の遊水地を通して樋門から排出されていたと推察する。チッソ工場からの排水路は田在川につながり、百間遊水地、百間樋門に至るのかを明確にするためにも、チッソ工場が保存する関連資料及び水俣市の保管する河川・排水路資料の精査が必要である。合わせて、排水口、樋門、足場の構造図と材料についての資料収集と調査が必要である。考証館に展示されている猫小屋と一体に保存。水俣病事件を学ぶ拠点としての整備。樋門の内部構造(石積み?)、基礎構造、百間塘の時代の構造についての発掘調査が必要。	A	伊能忠敬地図。水俣工場新聞。『水俣病』。熊本学園大学作成ブックレット。『聞書水俣民衆史一・二巻』。『水俣病の科学』 『〈水俣病〉事件の発生・拡大は防止できた』。天保十四年強風高潮之節海辺塘切絵図 其の一 1843年 崇城大学図書館所蔵絵図。明治40年『製塩場図面』〔熊本県立図書館所蔵〕
2	丸島樋門～百間樋門間の水路	第1集	江戸期の塩田時代には塩田用の入江の入り口に当たる場所が現在の丸島樋門であり（当時は樋門はなく入江の入り口）、入江の一部が利用され、その後の耕地整理等での水路網の構築の一部の可能性は高い。チッソ運動場の西南にある駐車場のかぼ地は、かつての塩田時代の入江の跡地とも推察でき、貴重な文化財的価値を有する場所である。その後、チッソ工場周辺が田畑だったころ、水田にそそぐ水路として役割を果たしていた。明治・大正期の水俣の田園風景を想像できる水路。その後、チッソ工場からの汚水及び市民の生活雑排水が湾に排出されるまでの排水路として水路変更もされて整備された可能性がある。	江戸期の大廻塘に接し、丸島港から塩田に向けて入り込んでいた入江の位置と形状を明確にする必要がある。明治・大正期のこの地域の耕地整理、農業用排水路(水俣川の堰も含む)、及び水利組合の権利に関する資料を確認する。この水路は江添川(田在川)とも称されていることより水利権、市の管理権等の歴史的推移を明確にする。	B	水俣工場新聞。『おるが水俣』。『聞書水俣民衆史一巻』。『水俣病の科学』。天保十四年強風高潮之節海辺塘切絵図 其の一 1843年 崇城大学図書館所蔵絵図
3	丸島樋門・排水口	第1集	現在の丸島樋門は、江戸期の塩田時には樋門は設置されず、塩田の外濱の四十間塘に至る入江の入り口に当たる。外濱の防潮堤の役割を果たした大廻塘の塘の下で、現在の丸島樋門に近い箇所に二つの樋門（井樋）が設置されていた江戸期の図面がある。明治末期に塩田が配置された水田に変更した時点でも丸島樋門はなく、入江が短縮されて存在する。明治から大正において設置されたとも推察でき、塩田・水田後の主には排水のための樋門として造成されたと推察でき、近世から近代への水路の機能変化を立証する文化財としての価値あるものと評価できる。	現在の樋門が造成されたかを特定する必要がある。またその構造と管理主体の推移を明確にする。この排水口からたれ流しが始まった正確な年代と当時のチッソ工場が保存する関連資料。排水口、樋門、足場、の構造図と材質を明らかにする。石積みとして樋門の可能性もある。大廻り塘との構造的つながりは塩田時代にはないと推察できるが、いつ、樋門の橋が造成されたかを明確にする。現在は市の下水道課の管理であるが、特にチッソが工場排水を流す頃からの排水管理・樋門管理の主体は誰か。百間樋門とは異なる樋門の歴史を明確にする必要がある。	C	『聞書水俣民衆史一巻』。『水俣病の科学』。天保十四年強風高潮之節海辺塘切絵図 其の一 1843年 崇城大学図書館所蔵絵図
4	大廻塘・樋門（井樋）・遊水地	第1集	江戸期に干拓して造成された二番目の塩田（外濱）のための、防潮堤の機能を果たす塘として価値が高い。昭和30年の農水省の塘の構造調査で明らかになっているように空石積みの構造（チッソの埋め立て地の位置には鞆石垣が隠されている可能性もある）であり、今後の現地調査、発掘によっては18世紀末に造成された文化財とも推定される。江戸期の図面には大廻塘の塘に下に二つの樋門（井樋）、遊水地（潮だまり）も描かれ、塘の石積み及び樋門を守る樋の輪も描かれ、非常に文化財的価値ある塘である。遊水地の塘側の腰壁の空石積みも貴重な文化財的価値がある。石牟礼道子の絵本『みなまた海のかえ』に大廻塘は描かれ、晩にはモタンのモゼやモーマやガーゴの妖怪たちの遊び場となるやぶであると書かれ、水俣の生活文化の場所としての価値も高い。天草を眺める懐かしい場所ともいわれてきた。	江戸期の絵図にある、大廻塘の下に設置されている二つの樋門について、現場での発掘調査を含めて位置と構造特定することが必要である。右井樋に関しては現在の丸島樋門での遊水地に向けた樋門がそれに相当する可能もある。もう一つの左井樋に関してはかつての管理小屋の周囲の発掘で特定できる可能性もある。遊水地の塘側の腰壁の調査及び現在の塘の道路下及び法面の構造も発掘的な調査が必要である。さらに、当時の風景を想像するために明治・昭和初期の絵や写真の記録資料が必要である。遊水地はチッソ工場が汚水を流していた時にも、丸島樋門手前での樋門を開け、調整池の機能を果たしていたことも立証する必要がある。	D	市史。『椿の海の記』。『水俣民衆史』。『不知火海民衆史』。『水俣病の科学』。『みなまた海のかえ』。天保十四年強風高潮之節海辺塘切絵図 其の一 1843年 崇城大学図書館所蔵絵図。1960年農林省作成『干拓堤防台帳第2輯(干拓堤防調査書)』。明治40年『製塩場図面』〔熊本県立図書館所蔵〕
5	塩釜神社、四十間塘、旧塩田（外濱）（チッソ陸上競技場）	第1集	江戸期の17世紀～18世紀の干拓塩田開発のシンボリックかつ精神的価値を有する神社としての価値は高い。また、初期の開発時に百間塘と合わせて造成された四十間塘の歴史文化的価値は高い。チッソ競技場の駐車場のくぼ地がつかつての入江の跡地としての価値も高い。製塩産業が衰退した後の、水田整備(大正6年耕地整理)での基盤整備、その後のチッソによる工場関連敷地に転用された時代を見てきた象徴的文化財である。	今でも寄ろう会により塩釜神社での作業が文化を絶やさないために行われている。しかし、塩田跡地は住宅や工場、グラウンドや学校に変わり、塩田の中に神様が鎮座するイメージが想像しにくくなっている。入り浜式での塩づくりに即した文化の継承も必要である。神社の海側にある四十間塘の発掘及び、丸島からの潮引き水路のため池の発掘も必要である。	E	市史。明治から昭和の水俣(簡易マップ)水俣市教員委員会。『聞書水俣民衆史』。天保十四年強風高潮之節海辺塘切絵図 其の一 1843年 崇城大学図書館所蔵絵図。明治40年『製塩場図面』

6	八幡残渣 プール(旧 プール、新 1、2プール)	第1集	チッソの廃棄物処理のための残渣プールとしての機能だけでなく、チッソの塩田跡、塩田宅があった場所でもあり、漁場でもあった。昭和20年以前の海岸線の形状がわかる場所である。1959年7月猫実験で水俣病の原因が工場排水であることが明らかになったチッソは、排水経路を百間から八幡に変更。水銀を含んだ酢酸排水や硫酸排水、リン酸排水なども流し込んだ。そのため、八幡残渣プールから水銀が八代海(不知火海)に拡散されることになり、それまで水俣湾側に発生していた水俣病患者が、水俣川側、湯の児、津奈木、葦北方面、さらに対岸の御所浦、天草、不知火海一帯に発生することになる。	チッソ(現JNC)の所有。水銀だけでなくダイオキシン他の有害物がうめられている。これを含めて、隠し排水口についての調査も必要である。	F	水俣工場新聞。熊本学園大学作成ブックレット。写真。『水俣病の科学増補版』
7	旧工場	第1集	チッソ水俣工場の発祥の地であり、日本の化学工場の歴史を知るうえで重要な場所である。チッソの創業者・野口遵が寝泊まりして運転の指揮をとったとされる事務所(オンドル式暖房)、労働者が入浴した浴場、洗濯場があった場所である。2023年6月までは工場建屋の一部・レンガ造りが残されていた。また旧工場ができる前は沼田んぼであったと言われている(近くに用水路あり)。水俣川が現在のように改修される以前、古賀側の河口にできたのが「日本カーバイト商会」で、カーバイトや石灰窒素肥料を日本で初めて製造した。後に、日本窒素肥料株式会社「チッソ(株)」(現JNC)の発祥の地である。1909年(明治42)に、赤レンガ造りの三階建ての近代的工場が建設された。人々は、現在地の新工場に対して旧工場と呼んだ。	日の出製材所(不動産)所有。残されているレンガ等の保存活用、工場跡地の部分保存、当時の写真資料等提示が必要である。近年、宅地にされ、民間に売却されている。	G	水俣工場新聞。熊本学園大学作成ブックレット。写真等。
8	梅戸港	第2集	梅戸湾に位置するチッソの専用港。工場の発展とともに整備され、火力発電所も建てられた。鹿児島本線水俣駅の開業により、梅戸港は海上・陸上交通の要所となった。チッソの原料・製品の受け入れ搬入は梅戸港と工場のあいだのトンネルを利用しておこなわれた。初めの頃はトラックを利用しておこなわれた。のちにもう一本トンネルがつくられ、トラックやベルトコンベアで行われるようになった。1959年の沿岸漁民闘争では漁民が船をロープで結び海上封鎖をおこない、1962年の案賃闘争では労働組合が梅戸港から工場に通じるトンネルを封鎖した。	チッソ進出以前は水俣の名勝景観の地として知られた。当時の面影については、『葦北郡絵図』などから確認する必要がある。また、梅戸港と工場をつなぐトンネルについても調査が必要だが、チッソ(現JNC)敷地内のため調査が簡単ではない。	H	『ガイドブック 水俣病を学ぶ、水俣の歩き方 新版』『新 水俣市史 民俗・人物編』
9	サイクレーター	第2集	1959年12月に完成した排水浄化装置。内径18メートル、高さ約5メートルの円筒形建造物。荏原インフィルコ製。59年12月、地元漁民からの排水浄化の要求が高まる中、設置された。ただし、サイクレーターに有機水銀除去機能はそもそもなかった。サイクレーター設置が計画されたのは、有機水銀説の出る以前であり、設置目的はペーハーの調整と固形物除去にあった。だが、排水を透明にすることで、「きれいになった」と世間を欺く役割を果たした。現在もチッソ(現在JNC)の一画で稼働している。	水俣病事件におけるチッソの対応を象徴する重要な建造物だが、工場敷地内にあるため、見学等が簡単ではない。写真・映像などで確認する必要がある。	I	『水俣病小史 増補版』、『水俣病の科学増補版』
10	湯堂・袋湾	第2集	湯堂は水俣病患者多発地区の1つ。袋湾は茂道山(西の浦)の半島に抱かれた40ヘクタールの湾。この入江は昔から地引網や江切網の漁場であり、荷物の積出港だった。イワシのような回遊魚の休息と産卵に絶好の場所である。	茂道湾と同様に茂道山(西の浦)の歴史・文化について確認する必要がある。無形文化財としての漁撈文化について先行研究のレビュー、調査が必要である。	J	『ガイドブック 水俣病を学ぶ、水俣の歩き方 新版』『水俣の啓示上・下』『新 水俣市史 民俗・人物編』
11	茂道・茂道湾	第2集	茂道は水俣病患者多発地区の1つ。茂道山(西の浦)の一帯は肥薩の国境地帯であり、もともとは肥後の国に属していたが、一時期薩摩に属していた時もある。肥後藩はここに薩摩の動向を監視するための山番人を置いた。かつて山には松が生い茂っていたが、伐採やマツクイムシにより激減した。茂道湾は袋湾と同様に魚の避難、産卵に絶好の場所である。「魚の宝庫」と呼ばれた。	袋湾と同様に茂道山(西の浦)の歴史・文化について確認する必要がある。無形文化財としての漁撈文化について先行研究のレビュー、調査が必要である。	K	『ガイドブック 水俣病を学ぶ、水俣の歩き方 新版』、『水俣の啓示上・下』『新 水俣市史 民俗・人物編』
12	百間地蔵	第2集	百間排水口のすぐ近くに、1994年に新潟から水俣に贈られた地蔵がまつられている。川本輝夫さんは水俣の八十八か所に地蔵を建てたいと願っており、この百間地蔵はその一番札所である。地蔵の横には碑があり、そこには「水俣病巡礼八十八ヶ所 一番札所 阿賀の岸から不知火へのお地蔵様 水俣病事件犠牲者に捧ぐ 鎮魂の聖地 漬恨浄土之地 慟哭永遠之地 平成六年十二月吉日 水俣病患者連盟委員長 川本輝夫」と書かれている。	新潟県安田町には水俣の石で作られた地蔵がある。そちらについても確認が必要である。	L	『ガイドブック 水俣病を学ぶ、水俣の歩き方 新版』
13	猫実験の小屋(水俣病センター相思社歴史考証館)・猫の墓・猫の位牌	第2集	歴史考証館にあるネコの実験小屋はチッソ附属病院で水俣病の原因究明のための実験に使用されていたもの。チッソの加害を説明するモノは、チッソの内部資料が入手できないこともあり貴重。また、水俣病センター相思社には「猫の墓」がある。『水俣』1975.4.25に「水俣病で死んだ猫の墓も完成」という見出しが見つけれられる。記事には、次のようにある。水俣病で死んだ動物は猫だけでなく魚や貝、カラスも豚も狂い死んだ。だが人間に一番親しく、家族同様に扱われていた動物が猫である。それぞれ名前をもらい、猫は食事のたびに食卓の下にうずくまり、人間たちを見上げた。そうした水俣病で死んだ猫の墓をつくりたいという水俣の人の願いが猫の墓となった。また、猫の墓完成に併せて、「研究犠牲猫族之霊位」という位牌も相思社に渡し、供養されている。この位牌は、細川一医師に乞われ、源光寺住職中村将顕の書いたものである。上記『水俣』記事に詳しい。	2021年、国立民族学博物館の協力のもと保存処理がなされた。ネコ小屋のように当時の証拠となるモノの確認が必要である。猫の墓、猫の位牌については『水俣』はじめ過去の資料から経緯を明らかにする必要がある。	M	水俣病センター相思社ホームページ、『縮刷版水俣』

14	避病院	第2集	1877年、西南戦争ののちのコレラ流行の際に置かれる。1890年水俣村立病院が置かれた開設した場所でもある。1956年、次々と患者が発生した際、保健所などの行政と工場附属病院は協議し、市民や他の入院患者らの不安解消のため、避病院に患者を収容することを決め、ぼろぼろだった避病院を修理した。この隔離をつうじて「水俣病差別」は始まった。	現在は跡地としてのみある。標識などを作成し、水俣病関連遺跡群の重要な場所であることを示す必要がある。	N	『ガイドブック 水俣病を学ぶ、水俣の歩き方 新版』
15	旧保健所	第2集	1956年5月1日、チッソ附属病院の細川一医師と野田兼喜が「原因不明の疾患の発生」を水俣保健所に届け出た。当時の保健所長は伊藤蓮雄。伊藤は水俣保健所2階の所長室隣の会議室を用いてネコ実験を行い、水俣病を発病させている。保健所の当時の所在地は水俣市洗切町1丁目1（現在の水俣市民館別館）。1958年10月27日、出火により195坪が全焼した。この火事により水俣病に関する当時の記録が失われた。	旧保健所の所在地は、水俣市洗切町1丁目1。伊藤蓮雄の残したテープがあり、その内容をふまえた高峰武氏の論稿がある。その論稿をふまえ、火災でどのような資料が消失したのか、明らかにすることが望まれる。また建物の間取りなどの確認も必要。	O	高峰武「水俣病公式確認と猫実験の時代 伊藤蓮雄・元水俣保健所長のテープについて」『水俣学研究』第8号
16	チッソ附属病院	第2集	チッソ従業員の診療所として発足。1969年7月閉鎖。企業内診療所として始まり、水俣初の総合病院として多くの患者診療に当たる。1956年4月21日、5歳11か月の女兒が脳症状を主訴として小児科を訪れ、同月29日、その妹が同様の症状で入院。細川一医師は、その2人の母親から隣家にも同様な症状の患者がいることを知り、56年5月1日、水俣病保健所に報告。「水俣病の猫400号実験」がなされた場所としても知られる。	当時の所在地を知らない者には場所の特定が簡単ではない。建物内の間取などの確認が必要である。	P	『ガイドブック 水俣病を学ぶ、水俣の歩き方 新版』
17	藪佐残渣プール（藪佐沈殿池）	第2集	藪佐は、現在町名変更により汐見町に変更されている。新しくできた3号線からガソリンスタンド（水俣石油）を右に曲がり、江添川橋を渡ってすぐの所に現在サン自動車整備工場の敷地となっている場所がある。ここはかつて、江添川の下流の沼沢地で葦などが生えエビやエビナ、フナなどの小魚がいた。汐見町への道一本隔てた現在のチッソ工場敷地は、かつて塩田や田んぼだったところで汐見町へ通じる道路（小道）わきの湿池（沼沢地）は、塩田とのかかわりも深かったと思われが、チッソはこの沼沢地帯に、カーバイド残渣を捨てるための「カーバイド残渣プール」を作った。そのため水俣湾（百間港）にはカーバイドの残渣が数メートルにわたって堆積し、港湾機能が損なわれて浚渫工事が行われた。その後カーバイドの生産が増大した事、水俣病が社会問題化したこと等もあり、「カーバイド残渣プール」は水俣川河口に変更された。このように「藪佐残渣プール」は水俣病拡大の原点でもある百間排水溝の変遷の歴史、チッソが漁民から漁場を収奪し埋め立て、土地を拡大していった歴史、廃棄物による土壌汚染を知ることの出来る重要な場所である。	塩田文化の痕跡を探るためにもこの沼沢地帯が消失していく経緯を探る必要がある。またカーバイド残渣プール中に堆積された、水銀その他の重金属の種類・量を調査する必要があるが、チッソKK（JNC）の所有地であることなどから調査されていない。	Q	『水俣病事件資料集 下』
18	明神地先埋め立て地（馬刀潟埋め立て地）	第2集	現在、公害防止事業で埋め立てられたエコパークの横に、小さな排水溝がある。その陸地側の横に立ち並ぶのがチッソ（JNC）開発の工場群で、チッソのカーバイド残渣等で埋め立てられて作られた「明神地先埋め立て地」（馬刀潟埋め立て地）である。ここは、かつて漁民にとって最高の漁場で、地引網が引かれ、砂地であったところからエビが多く生息しエビ簗（エビ網）が建てられた。1926年6月、チッソが漁業組合に対して「永久に苦情を申し出ないことを条件に1,500円の見舞金を支払い、地先20,000坪」の埋め立て承認を得ていたがそのまま天然の馬刀潟だった。しかし1956年に埋め立てられた（チッソ工場新聞、水俣病事件資料集）。この明神地先埋め立て地を獲得した手口はその後、低額の見舞金で漁民に沈黙を強いる手口は1959年の互助会との見舞金契約（1958年12月）などでも繰り返される。	その変遷の一部は水俣病関連の資料集や『水俣市史』『チッソ工場新聞』で確認できるが、十分とは言えない。水俣市やチッソ社内の文書を探り、最終的に埋め立てたカーバイド残渣に含まれる重金属も調査する必要がある。現在前田水産工場の前の空き地があるが、ここから「水俣現地研究会」が高濃度の水銀が検出し、熊本県、チッソに調査要求したが実現していない。	R	『チッソ工場新聞』『水俣病事件資料集 下』『新水俣市史 下』
参考	藪佐残渣プール、明神地先埋め立て地に関する参考	第2集	水俣港は、1933年に商港・工業港として認められ、1937年には2,000トン級の船が接岸できる港となったが、その後、水俣工場から流れ出るカーバイド残渣によって次第に埋まり、干潮時には船舶航行が不能状態になった。そこで1949年から浚渫・埋め立てなどの整備が進められた。湾内整備の一環として、1954年7月13日には新日窒と水俣市漁協とのあいだで海面埋立の覚書が交わされている。（この覚書では、チッソが港北側明神崎に沿って埋め立てる代わりに2,000坪を漁協に無償譲渡することが約束されたが、チッソは漁協に返還していない。）			



図1 水俣市水俣病関連遺跡群の位置図

Ⅱ. 水俣市民の思う水俣遺産／水俣遺産サミットの成果

1. 水俣遺産サミットの概要

水俣の歴史的遺構（跡）残す会は水俣市民が残したいと考える遺産についての意見を募集すること、市民へ水俣の文化や歴史に対しての関心を促すことを目的として「水俣遺産サミット」を開催した。概要は以下のとおりである（写真Ⅱ-1）。

また、サミットの翌日5月28日（日曜日）9時～12時には、実際に市民らで歴史的遺構を見て回るフィールドワークが実施された。

・主催:水俣の歴史的遺構(跡)残す会

・日時:2024年4月27日(土曜日)14時～16時

・場所:水俣市公民館ホール

・当日の参加者数:71名(スタッフを除く)

・当日の参加者の年齢層:10代から80代

・内容:以下の通りに進行した。

全体進行:松本幸美

ワークショップ進行:高木実

(1)開会挨拶(残す会:松永副会長)

(2)これまでの経過報告(加藤会長)

(3)各グループに分かれたワークショップ


テーマ①「私の残したい水俣の遺産」

テーマ②「私の案内したい水俣」

(4)報告「水俣病関連遺跡群の調査結果から見た、その意義と保存・活用～百間排水口樋門は、塩づくりの樋門だった?～」(元日本大学教授:糸長浩司)

(5)閉会挨拶(山下善寛)

写真Ⅱ-1



図Ⅱ-1 水俣遺産サミットのチラシ（写真Ⅱ-1）と当日の内容

(1) ワークショップの様子

当日のワークショップでは、（約7名～8名で1グループ）10のグループを作り、グループごとにワークショップを進めた（写真Ⅱ-2）。各グループには、1名の残す会のスタッフを配置し、グループ内での司会進行役を務めた。まず、グループ内において、簡単な自己紹介を行った（3分）。その後、テーマ①「私の残したい水俣の遺産」について、各自がポストイットに考えを記入する時間を設け、グループ内において意見を共有しあい、模造紙にポストイットを貼っていった（20分）。その後、各グループにおいて出た意見を全体で共有する時間を設けた（15分）（写真Ⅱ-3）。テーマ②「私の案内したい水俣」においても同様のワークを行った。ワークショップの結果、10グループ×2の20枚の模造紙が作成された（写真Ⅱ-4）。次頁以降でその分析の結果をまとめている。

(2) メディア掲載

本サミットは、読売新聞・西日本新聞・熊本日日新聞・TKUニュースなどの各メディアによって報じられた。内容は、本サミットを告知するもの、サミットの当日の様子を報道するもの、サミットの次の日に行われたフィールドワークの様子を報道するもの、様々であった。写真Ⅱ-5、6にてその一部を掲載する。

写真Ⅱ-2



写真Ⅱ-4



写真Ⅱ-3



写真Ⅱ-5(西日本新聞 4月27日)



写真Ⅱ-6(読売新聞 4月28日)



表Ⅱ-1 WSで抽出された内容「私の残したい水俣の遺産」

「水俣遺産サミット」で出された市民の思いや考え

★私の残したい水俣の遺産

〈自然、海～川～山〉

・美しい自然 ・海(50代女) ・きれいな海(70代男)
 ・海と住民のつながりの楽しみ(60代女) ・ヒメタツ(タツノオトシゴ)(40代女、40代男) ・恋路島(60代、80代男他) ・恋路島の夕日(70代男)
 ・水俣川全域(70代男) ・水俣川の清流 ・鞍の淵(内山)(80代女)
 ・水俣川土手の煙のぼり(60代男) ・小崎の潮止(80代男)
 ・湯の児(80代) ・湯の児の海(10代女、70代男) ・湯の児の美しい海
 ・湯の児吊り橋 ・太刀魚釣り遊覧船 ・埋立地から見える夕焼け
 ・「海と夕焼け」のそばの夕日(60代女他) ・湯の児海岸(80代男)
 ・湯の児海岸道路(60代女、70代男)
 ・湯の児海岸桜並木(50代女、50代男、60代男、70代男、80代女)
 ・丸島(70代男) ・坪谷、湯堂、茂道の風景(70代男) ・遠見の自然海岸(50代女) ・湯堂から見える海(60代女) ・坪谷 ・坪段の旧港(50代女)
 ・梅戸港の現在の風景全て ・グリーンスポーツの森(70代女)
 ・冷水の湧き水(40代女、70代女、70代男) ・冷水泉水と水神様
 ・鬼岳(つり鐘型の優美な山)(70代男) ・矢筈岳の風景(60代男)
 ・久木野、頭石等山間地の風景(70代女) ・久木野住吉神社の森(紅葉)(70代男) ・久木野の棚田、おいしい米(70代男) ・寒川の棚田 ・棚田の灯り
 ・湯出川沿いの棚田(70代男他)
 ・亀崎峠(60代女他) ・亀崎峠と頼山陽の碑、徳富蘇峰の碑(70代男)
 ・大関山(水俣市北最高902m) ・久木野寒川水源、流しそうめん(70代男他) ・寒川にある涙の別れ石(女) ・鬼の歯形 ・八の窪の大きな石(70代男)
 ・秋葉山(80代男) ・中尾山の景色(40代男) ・中尾山(龍山を含む)(70代男)
 ・中尾山公園(60代男) ・中尾山公園仏舎利塔(70代女) ・中尾山から見える街

〈海の温泉、山の温泉〉

・湯の鶴温泉(40代女、70代女) ・川に沿う湯の鶴の温泉街の風情(60代男、70代女) ・湯の鶴温泉喜久屋
 ・湯の鶴七滝(60代男、70代女、70代男) ・湯の鶴七滝遊歩道(60代男)
 ・みんみん滝(湯の鶴温泉近く)(70代男) ・湯の児温泉(40代女、60代男)
 ・湯の児、湯の鶴の温泉街(70代男他) ・湯の児海水浴場の舟湯(60代男他)

〈地域の歴史や文化〉

・貝塚(80代男) ・南福寺貝塚 ・小津奈木のめがね橋(60代女)
 ・薩摩街道とその標識(60代男、70代女、70代男) ・薩摩街道、橋線(40代女)
 ・陣内の石橋(70代男) ・陣内通りの白壁の家々 ・丸島のピン会社の風景
 ・国道3号線(旧、現)(40代男、60代男)
 ・龍王神社(40代女) ・加藤神社(陣内)(70代男) ・為朝神社(八幡)(80代女)
 ・各地区の神社 ・千人塚(40代女) ・城山官軍墓地(70代男)
 ・八十八か所巡り(湯の児、水俣一小裏)(70代) ・亀伝説石碑3基(70代)
 ・宝暦年間の多々良のはぜのき大岩公園(70代男) ・アメリカ軍のグラマン機から銃撃を受けた西平(多々良町)のはぜのき(弾が残る)(70代男)
 ・防空壕跡(南福寺、丸島、秋葉山など)(70代男) ・水俣二小の校歌
 ・古民家など古いもの(60代女) ・先祖から伝わった古民具(ざる、浜行手こくれ、台所道具) ・郷土芸能(袋の棒踊りなど、小中校生が継承)(70代男他)
 ・太鼓(40代女) ・竹細工(80代女) ・はぜの実、ろうそく、はぜのき館(40代女他)
 ・水俣の言葉(40代男) ・水俣弁(切に伝える気持ちがある)(60代女)
 ・最後に「か」がつく言葉の文化(方言の深みのある意味合い)(60代女)
 ・一人一人の記憶の中にある古い水俣の思い出(60代女)

〈水俣が生んだ思想や文学〉

・徳富蘇峰・蘆花(60代)(以前蘇峰の会のメンバー女) ・洲上毛氈
 ・石牟礼道子(60代)の本(70代女) ・高群逸枝 ・村下孝蔵・「初恋」(60代)
 ・徳富蘇峰、蘆花生家(70代、70代男、80代女他) ・蘇峰記念館(旧き水俣文庫)(70代男他) ・蘇峰の筆塚(袋天満宮境内)(70代) ・旧斎藤家(薄原)(50代女)
 ・赤星おぐま生家跡(陣内)(70代男) ・洲上毛氈生家跡(70代男)
 ・旧石牟礼宅(→カライモボックス)(50代女) ・カライモボックス(古本)(70代)
 ・徳富蘇峰、洲上毛氈の墓(70代) ・高群逸枝の墓(朝倉せつれい)(60代)

〈水俣の水と食〉

・おいしい水(70代女) ・寒漬(40代女、70代女他) ・寒漬とその風景
 ・月浦の漬物(70代女) ・水俣産のつわんこの味(60代女)
 ・かね、つわんこ、ねったんぼ(70代男) ・みかん ・甘夏(40代男)
 ・サラダ玉ねぎ(40代女) ・太刀魚 ・ちりめん
 ・蜂楽饅頭(10代女、70代女他) ・美貴もなか(10代女、50代女、60代男)
 ・三太郎餅 ・いきなりだご(70代女) ・アルルカンのケーキ
 ・「味心松」(魚料理)(40代男) ・はまぐり庵

〈水俣病を語り継ぐ〉

・水俣病関連遺産(70代女) ・曾木発電所(チッソに電気を送る)(伊佐市)
 ・古賀の旧工場(60代女) ・炭素工場の跡、旧工場(カーバイト)の思い出(50代女) ・チッソ会社の風景、パイプライン ・梅戸港の倉庫
 ・チッソに未だ天皇と砲弾の跡 ・チッソの跡地・建物(男) ・チッソの組合歌(労働歌)
 ・百間排水口(樋門と足場の全て)(60代女2、80代男他)
 ・丸島樋門(排水口)(80代男) ・チッソ内のサークレーター
 ・エコパーク(10代女、60代男) ・バラ園、野球場(エコパーク) ・水俣湾埋立地(50代女) ・親水護岸(50代男) ・親水公園と海の景色
 ・水俣病慰霊碑と乙女塚(60代男) ・乙女塚(50代男、60代男) ・仏舎利塔
 ・水俣病資料館と水俣病歴史考証館(60代男他) ・ユージンスミスが住んだ家
 ・水俣病資料館(60代男) ・水俣病資料館、語り部(40代男)
 ・水俣メモリアル(108個の水銀の玉) ・水俣病センター相思社(40代男、60代女) ・湯の児病院内に水俣一小分校があった事実(複数)
 ・水俣病の負の遺産 ・水俣病への関りを語る患者・関係者の言葉(70代男)
 ・水俣病学習資料集「青本」「黄本」(60代男) ・水俣協立病院(50代女)
 ・水俣エコハウス(旧称)(50代女)
 ・国民宿舎水天荘(70代男)
 ・エコネットみなまたの石蔵 ・ホスピタリティ(40代男)
 ・もやい直しの歴史(50代女) ・もやい直し(吉井元市長)(60代男)
 ・「のさり」という言葉(精神的な大切な心の遺産)(60代女)
 ・苦難に向き合った生き方 ・人々の思想(50代女) ・本物をつくる
 ・修復的正義の心(50代女) ・学んだもの、生き方(60代男)

〈 〉

・郷土歴史資料館(旧石器～縄文～弥生～)(を新設してほしい)(70代)
 ・川柳句碑80基(水天山公園)(70代) ・日本一長い運動場
 ・水俣駅(60代) ・恋龍祭みなと祭り ・移動販売(魚、野菜)(店から遠い場所)
 ・住民の災害時の避難所を山の上にほしい(男)

表Ⅱ-2 WSで抽出された内容「私の案内したい水俣」

☆私の案内したい水俣

〈海の見える風景〉

・海(50代女、70代男) ・不知火海 ・津奈木から見る不知火海 ・湯の児の海(10代、40代女、70代女) ・湯の児の風の時の夕日 ・湯の児(50代男) ・湯の児島(付近)(60代女他)
 ・福田農場から見る不知火海、天草の島々、夕日(60代女、80代女他)
 ・水俣病情報センターからの海、天草の風景
 ・湯の児温泉から見る夕焼け(80代女) ・親水護岸からの海、天草の島々
 ・海上から眺める親水護岸(70代) ・親水護岸でのイカ釣り
 ・月浦おれんじ館ふれあい公園から夕日 ・月浦ふれあい公園の夕日が沈む頃(70代女) ・茂道の海の風景 ・茂道の夕日 ・グリーンスポーツ(60代男)
 ・坪段 ・津奈木湾の早栗海岸(60代女) ・相思社からの風景
 ・恋路島(80代男他) ・恋路島に沈む夕日 ・芦北～津奈木～水俣の海岸線(70代男) ・湯の児海水浴場(50代女他)
 ・湯の児海岸(桜と梅が同時に観られる)(60代女、60代男) ・湯の児海岸桜並木(70代男、70代女) ・湯の児海岸道路(70代男、80代男)
 ・亀の首(丸島) ・大崎鼻公園先の御所浦給水の感謝の碑(70代男)

〈海と山の温泉〉

・湯の児温泉、湯の鶴温泉(40代女、60代女、70代男他) ・海と夕焼け
 ・昇陽館 ・湯の児のめくもりの家、潮風 ・鶴水荘(のディナー)
 ・旧水天荘 ・旧山海館

〈ふる里の風景〉

・中尾山に登る途中から見える水俣市内(40代女) ・中尾山からの町の月影(80代男) ・中尾山から見える水俣の眺め(80代女他) ・中尾山(70代男他)
 ・中尾山公園(70代男) ・中尾山のコスモス(70代男他)
 ・桜が咲いた時の中尾山(80代男) ・中尾山仏舎利塔(70代女)
 ・権現山 ・前坂、陣の坂(山手町一帯) ・山王神社からのチッソ工場(60代男)
 ・湯の鶴七滝(複数) ・頭石の巨石(70代女他) ・頭石村丸ごと博物館
 ・長野の諏訪神社 ・南福寺の竜王神社 ・湯の鶴神社、住吉神社の紅葉
 ・湯の鶴温泉神社の桜と紅葉、ほたる橋(80代女)
 ・湯の鶴の彼岸花の咲いた山 ・湯の鶴の温泉街、赤い橋、神社(70代女)
 ・住吉神社 ・住吉神社の森、木々(70代男)
 ・内山八十八所(朝日の影射す、夕日の下の)

・亀崎峠(複数) ・亀崎峠の山並み風景、徳富蘇峰の碑 ・亀崎峠周辺の茶畑
 ・茶畑(桜野、石飛など) ・棚田(寒川など各所) ・久木野の棚田
 ・棚田の灯りの風景(複数) ・久木野寒川水源とその周辺 ・水源(の山)
 ・幸橋から見える水俣川(朝、夜) ・久木野寒川の山中にある「涙の別れ石」
 ・寒漬を干している風景(40代男) ・水俣の人々の暮らしの中にある水のめぐり
 ・冷水水源と水神様(10代女、50代女) ・茂道松の切り株(80代) ・山野草
 ・我が家の畑(海が一望できる)(70代男)
 ・エコパーク(50代男、60代女) ・エコパークのバラ園(10代女、70代男、80代女他) ・親水護岸の公園 ・竹林公園(埋立地)(70代男)
 ・おれんじ鉄道が通る水俣の景色(40代女) ・チッソ工場のイルミネーション
 ・Xmasの時に飾る公衆トイレのイルミネーション(40代女)
 ・初恋通り(50代男) ・水光社(70代男) ・古賀町の窪田店(70代男)
 ・樫本商店 ・蜂蜜饅頭やかき氷のコバルトアイスを食べる所 ・ピナ取り
 ・肥薩おれんじ鉄道水俣駅(70代男) ・道の駅「ミナマタ」(土産館、カフェ)
 ・つなぎ美術館の外にある「石の声」「立ち仏」 ・太陽光発電の弊害(70代男)
 ・桜並木を昔のようにもって増やしてほしい(70代女)

〈地域の歴史や文化を知る〉

・八十八か所巡り(水俣一小など) ・城山公園(水俣城、官軍墓地)(70代男)
 ・久木野の昔の山城 ・薩摩街道(70代男) ・水俣～芦北の歴史を大事に
 ・エコパーク(50代男、60代女) ・エコパークのバラ園(10代女、70代男、80代女他) ・親水護岸の公園 ・竹林公園(埋立地)(70代男)
 ・西南戦争の関係遺構群(25か所)(70代男) ・袋天満宮
 ・徳富蘇峰・蘆花生家(60代男他) ・蘇峰記念館(70代男他) ・徳富蘇峰の銅像
 ・徳富蘆花の歌碑 ・徳富蘇峰の帰郷の辞 徳富蘇峰の墓 ・洲上毛氈の墓
 ・高群逸枝の墓(複数) ・亀伝説 ・陣内、古城を歩く(半日コース)(70代男)
 ・タコ取り名人の鶴川強己さん ・竹細工の井上克彦さん ・恋龍祭(10代女)

〈おいしいもの〉

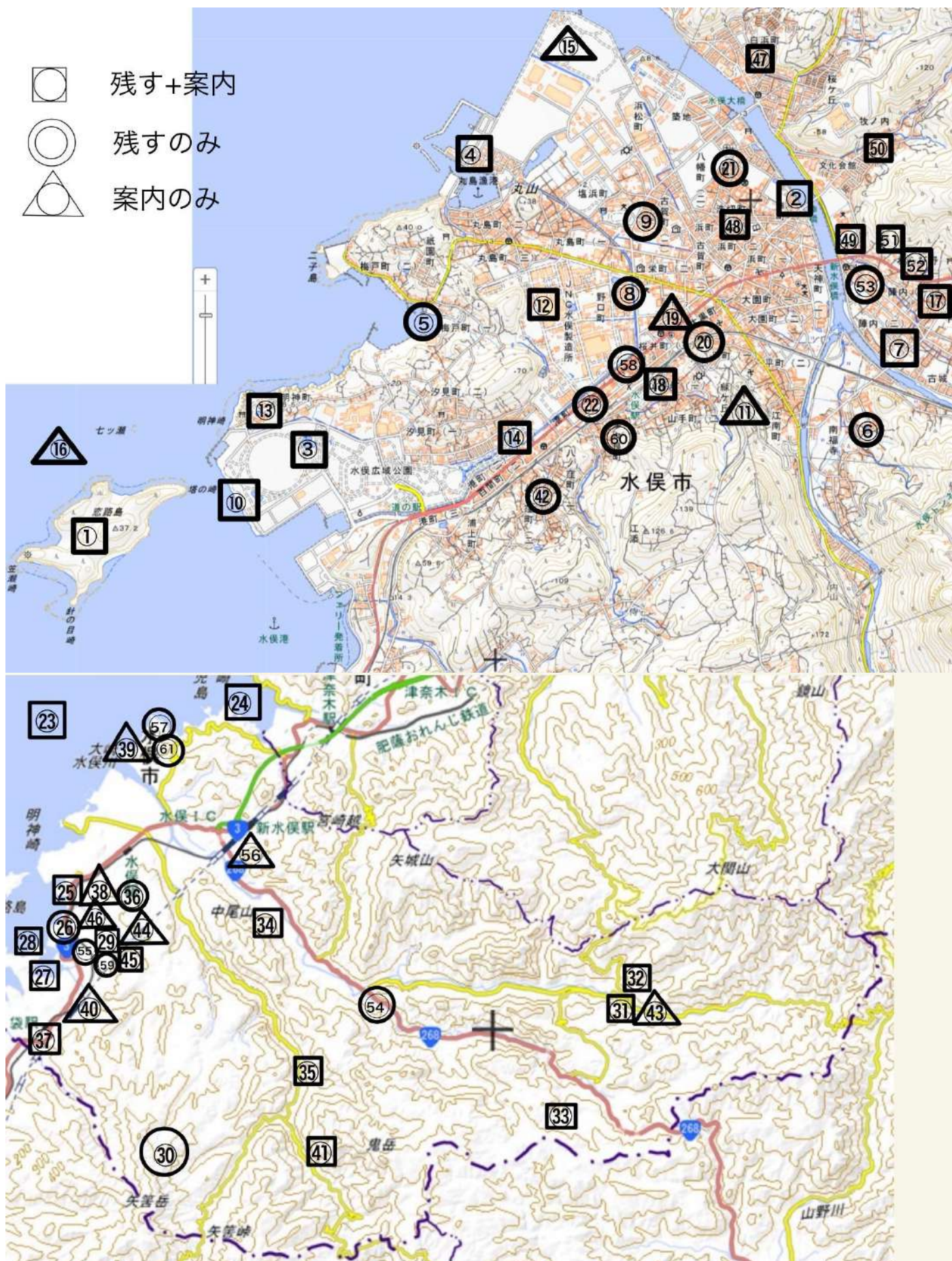
・「ひげの店」からの風景 ・福田農場(複数) ・鶴の屋(湯の鶴) ・浮浪雲工房
 ・船津鮮魚店の刺身 ・小田さんの卵 ・湯野牧場の牛乳 ・無農薬のお茶
 ・宮崎一心堂のソフトクリーム(60代男) ・緒方鞠 ・蜂蜜饅頭(10代女、60代男)
 ・美貴もなか(60代男) ・白亀伝説(菓子)(80代女) ・日昭堂(10代女)
 ・寒川水源亭(そうめん流し)(10代女他) ・南里レストランのわっぱめし
 ・丸島チャンポン(鶴岡食堂と丸島食堂)(70代女他) ・ひげの店(複数)
 ・Tojiya, Tojiya 屋台 ・モンベール農山(50代女) ・福田農場(食事)(50代女他) ・スイス(喫茶店) ・アマンド(喫茶店) ・オルガント(60代男)
 ・はまぐり庵(70代女) ・ピナの味(60代女) ・つわんこ、かね、ねったぼ(70代男)

〈水俣病を学ぶ〉

・百間排水口(50代女、60代女、80代男他) ・八幡残遺プール(80代男)
 ・仕切り網固定アンカー(説明表なし)(70代) ・丸島排水口(80代男)
 ・曾木発電所遺構(伊佐市) ・チッソ正門(複数) ・センコーを漢字の「扇興」で残してほしい ・患者さん宅(許されれば) ・ほたるの家(60代男)
 ・吉井正澄さんの家 ・水俣病犠牲者慰霊碑(エコパーク)(複数) ・百間の地蔵(40代男) ・エコパークの魂石 ・乙女塚(70代男他) ・カラモブックス(旧石牟礼さん宅)
 ・水俣病資料館、水俣病歴史考証館(40代男、50代、70代女他)
 ・ガイアみなまた(40代男) ・水俣病センター相思社(60代女、60代男、80代男) ・愛林館(40代男) ・袋に残る市川医院の建物
 ・水俣病情報センターの赤木さん関係の展示
 ・チッソ工場の全景が見える場所(協立病院の屋上、水光社立体駐車場最上階など)
 ・2001水俣ハイヤ節(袋小運動会) ・火のまつり
 ・「さばう・未来・水俣」の人、一生懸命生き抜いた人 ・緒方正実さん
 ・松永幸一郎さん、永本賢二さん、金子雄二さん、加賀田清子さん、長井勇さん
 ・チッソで働いて患者さんを心配してくれた藤田さん ・「がんばろう」のおじさん
 ・旧水俣二中の校歌の歌詞にあったチッソ工場のサイレンの音(8時、12時、16時30分) ・「環境モデル都市」という言葉

表Ⅱ－３遺産サミットで抽出された場所（N 残したい場所、A 案内したい場所、NA 両方）

番号	場所	複数回答	種別
1	恋路島	・恋路島・恋路島の夕日	N,A
2	水俣川	・水俣川全域・水俣川の清流・水俣川土手の鯉のぼり・幸橋から見える水俣川（朝、夜）	N,A
3	エコパーク、埋立地	・エコパーク・バラ園、野球場・水俣病犠牲者慰霊碑・エコパークの魂石・埋立地から見える夕焼け・水俣湾埋立地・竹林公園（埋立地）・恋龍祭	N,A
4	丸島	・丸島の海・丸島樋門・防空壕跡・亀の首・丸島チャンボン・丸島排水口	N,A
7	陣内	・陣内の石橋・陣内通りの白壁の家々・加藤神社・赤星おぐま生家跡・古城	N,A
10	親水護岸、水俣病慰霊碑	・親水護岸・親水公園と海の景色・親水護岸・親水公園と海の景色・親水護岸でのイカ釣り・火の祭り	N,A
12	チッソ工場	・チッソ工場のイルミネーション・チッソ工場のイルミネーション・チッソにきた天皇と砲弾の跡・チッソの跡地・建物・チッソの組合歌・チッソ内のサークレーター・チッソ正門（複数）・チッソ工場のサイレンの音（8時、12時、16時30分）	N,A
13	水俣病情報センター、資料館、水銀メモリアル	・水俣病情報センターからの海、天草の風景、情報センターの展示・水俣病資料館、語り部・水俣メモリアル（108個の水銀の玉）	N,A
14	百間排水口	・百間の地蔵、百間排水口（樋門と足場の全て）・八十八か所巡り	N,A
17	城山公園	・城山公園（水俣城、官軍墓地）	N,A
18	水俣駅（おれんじ鉄道）	・肥薩おれんじ鉄道水俣駅・おれんじ鉄道が通る水俣の景色	N,A
23	不知火海	・きれいな海・海と住民のつながりの楽しみ・ヒメタツ（タツノオトシゴ）・芦北～津奈木～水俣の海岸線	N,A
24	湯の児	・美しい海・吊り橋・海岸道路・桜並木・温泉、湯の児海水浴場の舟湯、湯の児島・湯の児の頃の夕日・湯の児温泉から見る夕焼け・湯の児海水浴場	N,A
25	坪谷、坪段	・坪段の旧港・坪谷の風景	N,A
27	茂道	・茂道の風景・茂道の夕日・茂道松の切り株	N,A
28	グリーンスポーツ	グリーンスポーツの森	N,A
29	冷水	・冷水の湧き水・冷水泉水と水神様	N,A
31	住吉神社	・住吉神社の紅葉・住吉神社の森、木々	N,A
32	久木野、寒川	・久木野の棚田、おいしい米・久木野寒川水源・久木野寒川の山中にある「涙の別れ石」・棚田の灯り	N,A
33	亀崎峠	・亀崎峠の山並み風景・亀崎峠周辺の茶畑	N,A
34	中尾山	・中尾山の景色・中尾山公園・中尾山公園仏舎利塔・中尾山から見える街・桜が咲いた時の中尾山・中尾山のコスモス・中尾山に登る途中から見える水俣市内・中尾山からの町の月影・中尾山から見える水俣の眺め	N,A
35	湯の鶴	・湯の鶴温泉（街）・川に沿う湯の鶴の温泉街の風情・旅館・湯の鶴七滝・湯の鶴七滝遊歩道・みんな滝・湯の鶴神社・湯の鶴温泉神社の桜と紅葉、ほたる橋・湯の鶴の彼岸花の咲いた山	N,A
37	乙女塚	・乙女塚	N,A
41	頭石村丸ごと博物館	・頭石の巨石・頭石等山間地の風景	N,A
45	水俣病センター相思社（水俣病歴史考証館）	・相思社からの風景・歴史考証館	N,A
47	カラモボックス（旧石牟礼さん宅）	・旧石牟礼さん宅（→カラモボックス）	N,A
48	徳富蘇峰、蘆花生家	・徳富蘇峰、蘆花生家	N,A
49	蘇峰記念館	・蘇峰の銅像	N,A
50	徳富蘇峰の墓	・徳富蘇峰の墓	N,A
51	高群逸枝の墓	・高群逸枝の墓	N,A
52	洲上毛氈の墓	・洲上毛氈の墓	N,A
5	梅戸港	・梅戸港の現在の風景全て・梅戸港の倉庫	N
6	南福寺	・貝塚・防空壕跡・竜王神社	N
8	水俣二小	・水俣二小の校歌	N
9	チッソ旧工場	・古賀の旧工場・炭素工場の跡、旧工場（カーバイト）の思い出	N
20	日本一長い運動場	・日本一長い運動場	N
21	為朝神社	・為朝神社	N
22	国道三号線（旧、現）	・国道3号線	N
26	湯堂	・湯堂から見える海・湯堂の風景	N
30	矢筈岳	・矢筈岳の風景	N
36	はげのき館	・はげのき、ろうそく、はげのき館	N
42	八の窪の大きな石	・八の窪の大きな石	N
53	洲上毛氈生家跡	・洲上毛氈生家跡	N
54	旧斉藤家（薄原）	・旧斉藤家（薄原）	N
55	ユージンスミスが住んだ家	・ユージンスミスが住んだ家	N
57	水天山公園	・川柳句碑80基	N
58	水俣協立病院	・水俣協立病院	N
59	千人塚	・千人塚	N
60	多々良町のはげのき	・宝暦年間の多々良のはげのき大岩公園・アメリカ軍のグラマン機から銃撃を受けた西平（多々良町）のはげのき（弾が残る）	N
61	国民宿舎水天荘	・国民宿舎水天荘	N
11	山王神社	・山王神社からのチッソ工場、鬼の歯形	A
15	八幡残遺プール	・八幡残遺プール	A
16	仕切り網	・仕切り網固定アンカー	A
19	初恋通り	・初恋通り	A
38	月浦	・月浦おれんじ館ふれあい公園から夕日・月浦ふれあい公園の夕日が沈む頃・月浦の漬物・遠見の自然海岸・水俣エコハウス（旧称）	A
39	大崎鼻公園	・大崎鼻公園先の御所浦給水の感謝の碑	A
40	袋	・袋天満宮・蘇峰の筆塚（袋天満宮境内）・2001水俣ハイヤ節（袋小運動会）・袋に残る市川医院の建物	A
43	愛林館	・愛林館	A
44	ガイア水俣	・ガイア水俣	A
46	ほたるの家	・ほたるの家	A
56	諏訪神社	・諏訪神社	A



図Ⅱ-2 残したい遺産と案内したい場所の位置

表Ⅱ-4 場所以外で残したい遺産と案内したいもの・人

	その他、場所としてプロットできないもの、飲食店などは以下に掲載した。
人	・石牟礼道子（の本）（N）・洲上毛氈（N）・高群逸枝（N）・村下孝蔵（N）「初恋」（N）・徳富蘇峰・蘆花（以前蘇峰の会のメンバー女）（N）・水俣病患者や関係者（A）・漁師や竹細工職人（A）
食べ物、飲食店、宿泊施設、特産品	・蜂楽饅頭（N,A）・はまぐり庵（N,A）・美貴もなか（N,A）・移動販売（魚、野菜）（N）・おいしい水（N）・寒漬（N）・月浦の漬物（N）・水俣産のつわんこの味（N）・がね、つわんこ、ねったんぼ（N,A）・みかん（N）・甘夏（N）・サラダ玉ねぎ（N）・太刀魚（N）・ちりめん（N）・三太郎餅（N）・いきなりだご（N）・アルルカンのケーキ（N）・「味心松」（魚料理）（N）・湯の鶴温泉喜久屋（N）・エコネットみなまたの石饅（N）・「ひげの店」からの風景（A）・福田農場・鶴の屋（湯の鶴）（A）・浮浪雲工房（A）・船津鮮魚店の刺身（A）・小田さんの卵（A）・湯野牧場の牛乳（A）・無農薬のお茶（A）・宮崎一心堂のソフトクリーム（A）・緒方麴（A）・白亀伝説（菓子）（A）・日昭堂（A）・寒川水源亭（そうめん流し）（A）・南里レストランのわっぱめし（A）・丸島チャンポン（鶴岡食堂と丸島食堂）（A）・ひげの店（A）・Tojiya、Tojiya屋台（A）・モンベール農山（A）・福田農場（食事）（A）・スイス（喫茶店）（A）・アマンド（喫茶店）（A）・オルガント（A）・ビナの味（A）・水光社（A）・古賀町の窪田店（A）・榎本商店（A）・蜂楽饅頭やかき氷のコバルトアイスを食べる所（A）・海と夕焼け（A）・昇陽館（A）・湯の児のぬくもりの家、潮風（A）・鶴水荘（のディナー）（A）・旧山海館（A）
概念、言葉、歴史	・亀伝説（N,A）→色んな者・ホスピタリティ（N）・もやい直しの歴史（N）・もやい直し（吉井元市長）（N）・「のさり」という言葉（精神的な大切な心の遺産）（N）・苦難に向き合った生き方（N）・人々の思想（N）・本物をつくる（N）・修復的正義の心（50代女）（N）・学んだもの、生き方（N）・水俣病学習資料集「青本」「黄本」（N）・水俣病の負の遺産（N）・水俣病への関りを語る患者・関係者の言葉（N）・水俣病関連遺産（N）・古民家など古いもの（N）・先祖から伝わった古民具（ざる、浜行手ごくわ、台所道具）（N）・郷土芸能（袋の棒踊りなど、小中校生が継承）（N）・太鼓（N）・竹細工（N）・水俣の言葉（N）・水俣弁（切に伝える気持ちが表れる）（N）・最後に「か」がつく言葉の文化（方言の深みのある意味合い）（N）・一人一人の記憶の中にある古い水俣の思い出（N）・防空壕跡（南福寺、丸島、秋葉山など）（N）・各地区の神社（N）・薩摩街道とその標識、薩摩街道、橋線（N）・湯の児病院内に水俣一小分校があった事実（N）・「環境モデル都市」という言葉（A）・道の駅「ミナマータ」（物産館、カフェ）（A）・水俣の人々の暮らしの中にある水のめぐり（A）・水俣～芦北の歴史を大事に（A）・西南戦争の関係遺構群（25か所）（A）・徳富蘆花の歌碑（A）ろかこうえん、けど色々ある・徳富蘇峰の帰郷の辞（A）
景色、自然	・八十八か所巡り（湯の児、水俣一小裏）（N,A）・寒漬とその風景（N,A）・Xmasの時に飾る公衆トイレのイルミネーション（A）・山野草（A）・茶畑（桜野、石飛など）（A）・前坂、陣の坂（山手町一帯）（A）・福田農場から見る不知火海、天草の島々、夕日（A）

(3) 分析

表Ⅱ-3は、水俣遺跡サミットにて参加者が記入した項目を場所と記入区分（残したい＝N,案内したい＝A）に分類した表である。この表からは以下のことが読み取れる。

まず、区分N,Aに関して。残したい、案内したい共に回答があった場所としては、大別すると1.自然に関わる場所（①②③⑩⑬⑮⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲など）と2.水俣の歴史や水俣病に関わる場所（④⑦⑫⑬⑭⑰⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲など）が挙げられた。

また、区分Nに関しては、神社やお寺といった歴史的建造物から、チッソ旧工場、八ノ窪の大石、旧ユージンスミス宅、多々良町のはげのき、国民宿舎といった市民によって親しまれているものの、現時点では遺構としての保存がなされていないものに対する意見が多かった。

最後に、区分Aに関しては、八幡残渣プール、ガイア水俣、ほたるの家、仕切り網といった水俣病学習に関わる場所や初恋通り、月浦、公園、神社など普段から市民が使用している場所や見慣れている風景などが挙げられているのが特徴的であった。

2. テキストマイニング手法による、遺産サミットによる市民意見の構造化

(1) 「『水俣遺産サミット』で出された市民の思いや考え」の構造化

図Ⅲ－2・3は、図1をテキストマイニングし、共起ネットワークのかたちで構造化したものである。

テキストマイニングとはテキスト（文章）から情報を掘り出す（マイニング）ことを意味する。近年では、アンケートの自由記述のような大量のテキストを、統計を用いて正確かつ客観的に分析する方法として注目されている。ここではこうしたテキストマイニングの代表的なソフトウェア KH Coder を活用して分析を進めた。

図Ⅲ－2・3では「共起ネットワーク」のかたちで、「遺産サミット」で出たワード・テキストを構造化した。KH Coder における共起ネットワークとは、（一文や段落ではなく）文章全体のなかで文脈上よく一緒に使われる（＝共起する）語同士を、線で結んだネットワークのことを指す。そのため線でつながる語同士は、よく一緒に使われる組み合わせを意味し、そのグループを見れば、テキスト中のおもな話題（トピック）を知ることができる。

(2) 図を見る際の留意点

「水俣遺産サミット」では「私の残したい水俣」と「私の案内したい水俣」という2つのワークがおこなわれた。これらのワークをつうじて、「私の残したい水俣」では約180の、「私の案内したい水俣」では約173のテキスト・ワード（語）が寄せられたが、図1から明らかなように、それらのほとんどは文脈をもたない単独の語である。こうした語群を1つのものとして統計処理した場合「ある語が全体において何回出現するのか」はわかるが、「ある語は他のある語とどのように一緒に使われるか」は必ずしも明確にならない。実際、約173と約180のテキスト・ワードをそれぞれそのままに分析してみても、ネットワークらしいネットワークは観測されなかった。

そこで分析者は、高木実氏と佐野良介氏による「分類」を、テキスト分析上の「外部変数」として活用して、この分類のもとテキスト・ワードがそれぞれどのように登場するのかを構造化することにした。この「分類」とは、たとえば図1「案内したい水俣」のなかの「海の見える風景」などのことを指す。こうして作成されたのが図2・3である。そのため、図2・3は「共起ネットワーク」のかたちを取っているが、実際には、高木氏と佐野氏の分類ごとにどんな語が出現するのかを示すにとどまる。図2・3を見る際にはこの点に注意されたい。

(3) テキストマイニングの結果に対する考察

以上をふまえたうえで、図Ⅲ－2・3から読み取れることを簡単に述べる。

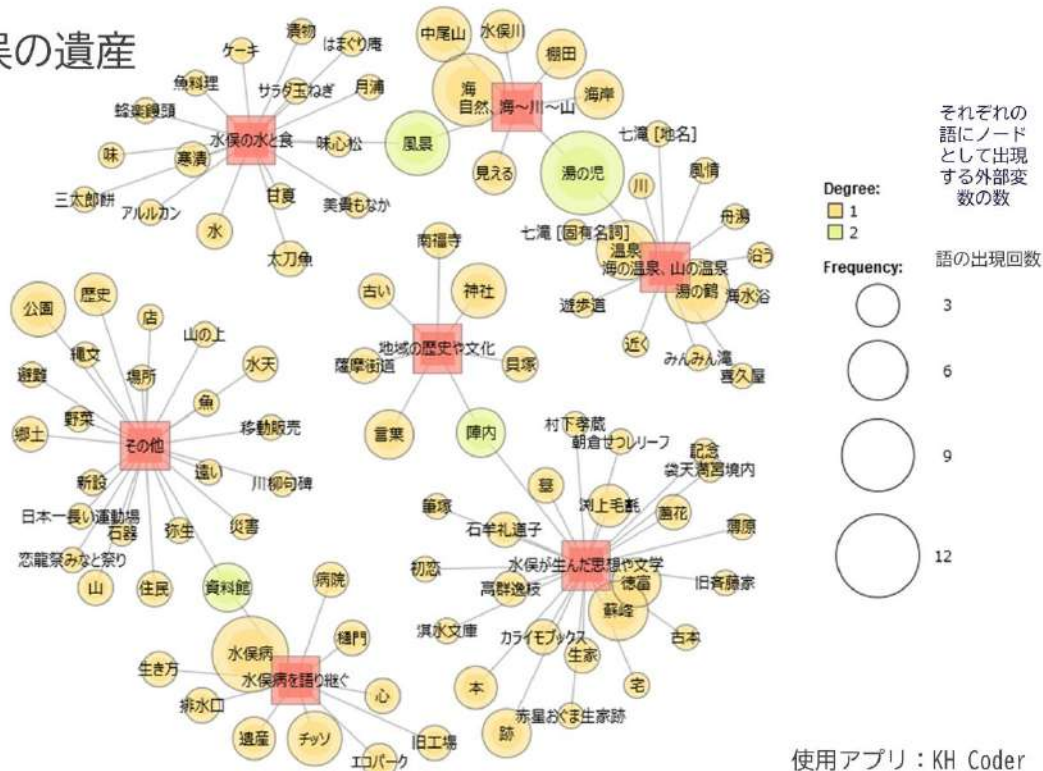
第1は、水俣市民が大切にし、残したい・案内したいと考える「水俣の遺産」の幅の広さということである。たとえば図で挙げられる語を、水俣市提示の「関連文化財群の構成文化財」（水俣市文化財保全活用計画資料 https://www.city.minamata.lg.jp/ki_ji0033705/3_3705_18315_up_5gmc57zv.pdf）と比較した場合、徳富蘇峰・蘆花の生家などは双方に挙げられており、一致する。一方、図Ⅲ－2・3は百間・丸島の排水口や、チッソ水俣工場の正門、旧工場、さらには郷土の作家・石牟礼道子の旧宅を活用した古書店カライモブックスなどが登場するが、こうした語は市の「関連文化財群の構成文化財」資料には登場しない。私たちはここから、遺産サミットに参加した市民の抱く「水俣の遺産」と2024年5月段階での市の文化財保全活用計画資料との間のギャップを読み取れるかもしれない。

また、もう一点、図Ⅲ－2・3から読み取れることを述べれば、いずれの図でも水俣病関連のモノだけでなく人が「遺産」として挙げられている点である。たとえば「私の残したい水俣」では「生き方」、「私の案内したい水俣」では「患者さん」という語が登場するが、それぞれの語を見ていくと、水俣病資料館の語り部や「きぼう・未来・水俣」で活動する患者さんのことを指していることがわかる。このように、水俣市民が患者さんの言葉・記憶・物語りを大切に思い、残すべき・案内すべきものとして重視していることも注目に値することである。

今後の水俣市の文化財保全活用計画を実現していくためにも、市民の参加と協力による文化財の保全活用行動は必至であり、この市民の行動があつて初めて地域の文化財は有効に保全活用されるものである。この点は、文化財保護法を改正して文化庁が進めている、文化財保全活用地域計画の本旨であると信じる。

私の残したい水俣の遺産

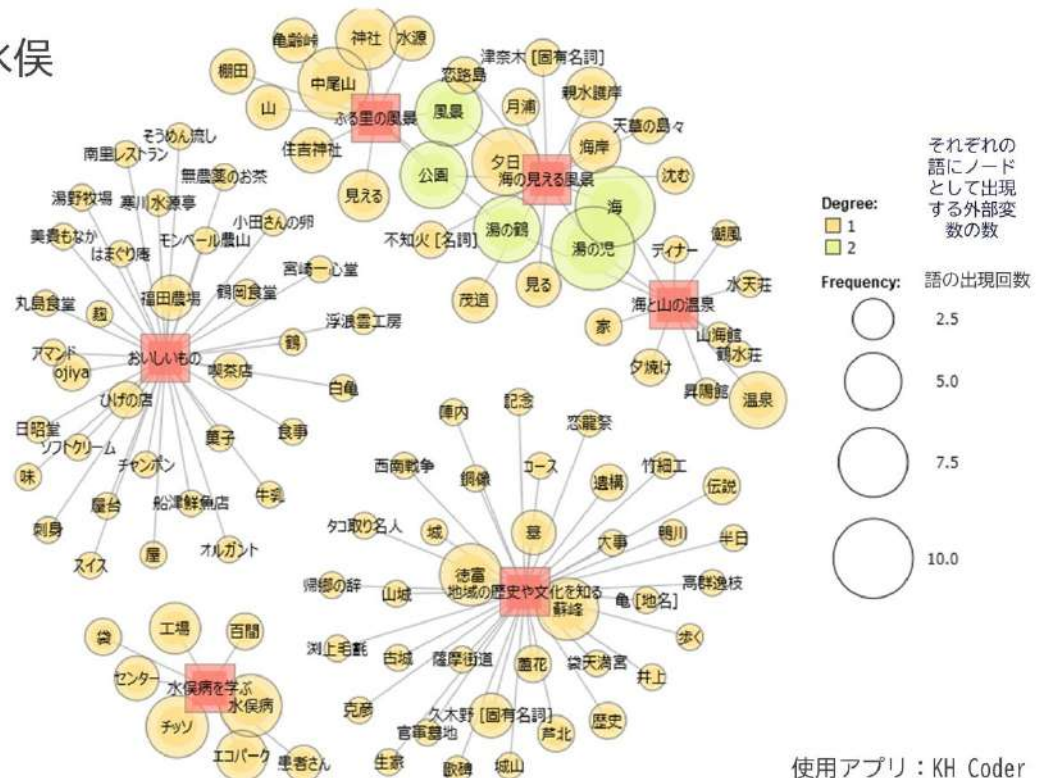
- 高木実さんと佐野良介さんの作成した「分類」を「外部変数」（テキスト以外の情報）として読み込み、共起ネットワークを作成した。
- 共起ネットワークとは、語同士の関連性や出現パターンの類似性をふまえ、テキスト中の語のつながりを可視化したものである。
- ここでは「1つ」以上出現する語を対象として、該当する322語のうち外部変数との共起関係が上位「100」に入るものを描画した。
- なお、凡例のDegreeとは、ある語（たとえば湯の児）がネットワーク上、いくつの外部変数と結びついているかを示している（湯の児の場合、2つの分類と結びついている）。



図Ⅱ－２ 私の残したい水俣の遺産、テキストマイニング

私の案内したい水俣

- 高木実さんと佐野良介さんの作成した「分類」を「外部変数」（テキスト以外の情報）として読み込み、共起ネットワークを作成した。
- 共起ネットワークとは、語同士の関連性や出現パターンの類似性をふまえ、テキスト中の語のつながりを可視化したものである。
- ここでは「1つ」以上出現する語を対象として、該当する336語のうち外部変数との共起関係が上位「100」に入るものを描画した。
- なお、凡例のDegreeとは、ある語（たとえば湯の児）がネットワーク上、いくつの外部変数と結びついているかを示している（湯の児の場合、2つの分類と結びついている）。



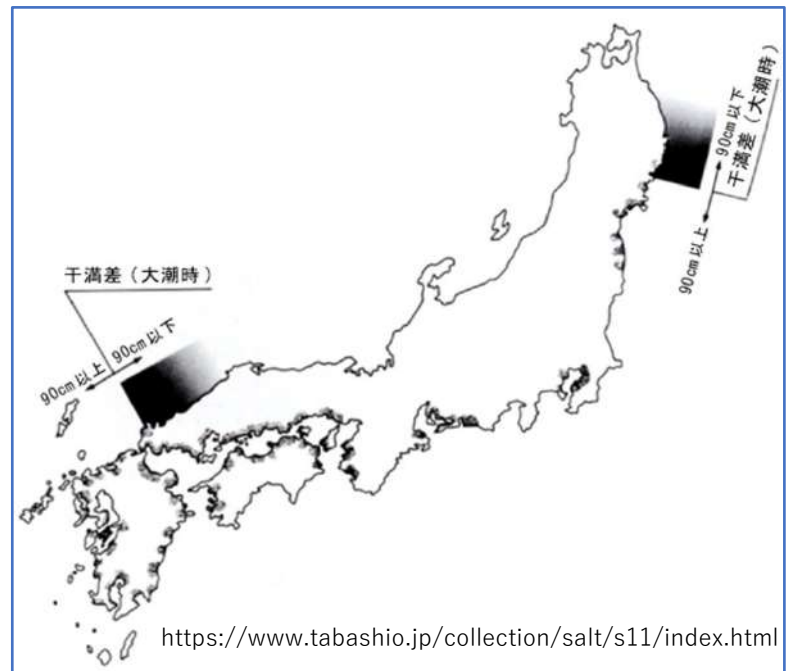
図Ⅱ－３ 私の残したい水俣の遺産、テキストマイニング

Ⅲ. 江戸期からの水俣市の塩田遺構の考察

1. 江戸期の水俣の塩田開発

(1) 入り浜式塩田について

塩田は大きく分けると揚げ浜式と入り浜式があるが、水俣において江戸期に開発された塩田は入浜（いりはま）式塩田であることは第一集で述べた。この方式は、揚げ浜式の重労働を伴う方式に対して、江戸期に開発された非常に理知的な方式である。潮の干満を利用して、海水を自動的に、樋門を介して塩浜へ導入する方式である。導入した海水を潮溝を介して、砂地に浸透させた後、天日による自然の力である毛細管現象を巧みに活用して、濃い塩分を含む砂を集め、それを燃焼させる製塩方式である。このためには、一定の干拓技術、潮溝の建設、堤防（塘）の建設等の土木事業の開発が必至であるといわれる。また、この方式は干満差の大きな内海や、干潟の発達した場所に多く見られた。



図Ⅲ－1 全国の入浜式塩田の分布

自然干潟地から始まり、しだいに大規模な堤防や海水溝などをつくる技術が発展し、大規模な入り浜式塩田がつくられる。江戸時代初期に開発された大規模な「入浜式塩田」は、瀬戸内海沿岸の十カ国で盛んとなり、赤穂浪士の舞台となった赤穂の塩田等が有名である。この当時、元禄期（1688年～1704年）には、瀬戸内海で1600町歩の干拓塩田があったといわれる。この周囲は「十州塩田」と呼ばれ有名であった。

入り浜式塩田の仕組みに関しては、第1集で述べているので割愛する。満潮時に、塘の下に設置した樋門を開けて海水を塩田に取れいれ、それを塩田の砂にしみこませ、天日により毛細管現象で塩分を上昇させ、散布しておいた砂に付着させ、それを回収して釜で煮て塩を採る方法である。

塩田の様子は、下図のようである。



<https://aucview.aucfan.com/yahoo/o1119355348/>

大日本物産図会 赤穂塩浜の図』(明治10年<1878>) 三代歌川広重

たばこと塩の博物館 <https://www.tabashio.jp/collection/salt/s11/index.html>

図Ⅲ－2 入浜式塩田の様子

熊本に近い、長崎県佐世保での江戸期から明治期での塩田開発の様子を紹介する。長崎県佐世保市崎岡町広田塩田である。「浜に水門を設け、砂浜全体に溝を掘り、一番浜から八番浜までに分けられ、一浜の広さが十八反、(一七八アール)、一浜に従事する浜子が十五人で当たっていた。一日の賃金が男子、通宝一枚(七厘)、女子五厘だった。当時米一俵買うに男子二十一日、女子三十日もかかった。入浜式塩田で忙しいときは他からも人夫を入れていて、浜師(技術者)は主に三田尻(防府)、時津等から来ていた。満潮になると水門を閉め、浜子がヒシヤクで塩水をまき、天日で乾かし、乾くと又まき何回も繰り返し、白くなったら砂を集めて水をかけ、濃い塩水を釜に入れて煮詰めて塩を取る。入浜式製塩は、赤穂で開発され、塩焚は一日三回、燃料は主に北松炭を用いた。一回に十二斤俵 1500~2000 俵を製造した。出来た塩俵は早岐港まで船で運び、塩問屋に卸した。廃藩後塩田は民営に移管されたが、平戸藩では一番ながく続いた塩田である。」(広田小学校創立百周年記念誌及早岐郷土史概説抜粋、<https://hiroda.net/hiroda-history/ootebaru/>)

(2) 水俣の塩田開発の概要

水俣市が面する八代海でも江戸期の17世紀に干拓による塩田開発は盛んとなる。水俣においても同様である。この点は、第1集で触れている。熊本県総合博物館ネットワーク・ポータルサイト

(<https://kumamotomuseum.net/blog/archives/chiiki/1396>) では、揚げ浜式としているが、これは間違いであり、(財)塩事業センターのHPでは、「熊本県の塩田は、有明海・八代湾岸地域の広大な干潟を利用した大規模な入浜式塩田だが」とある(https://www.shiojigyo.com/study/fudoki/kyushu_okinawa/)。水俣市史(下巻 p248)には、「寛文七年(1667年)深水家四代の頼氏手によって丸島から土木工事が起こされ、四十間塘、百間塘と呼ばれる潮止め工事が完成、塩田四四町歩が造成されて零細農家の重要な兼業となり、……」とあるように、大規模な干拓と塘の造成により入り浜式塩田が造成されたと考えるべきである。

この時に、堤防として四十間(約80m)塘と百間(約180m)塘が造成され堤防として造られた。その100年後に大廻りの塘が造設され、新塩田として19町歩の外浜塩田が造成された。これらの一連の塩田開発は、小農にとっては貴重な経済的よりどころになったことは確かである。

明治時代、チッソ工場が塩田地に進出する前の塩田の様子が図化されているものとして、「製塩場図面」(熊本県立図書館蔵)がある(図Ⅲ-3)。旧水俣川、中洲の河口に塩田(一部水田含む)があり、百間塘から東に内浜の塩田があり、その北側に大廻り塘と外浜塩田がある。丸島漁村も明記されている。古賀から丸島への道路も明記されている(図上の明朝体の文字は筆者が追記したものである)。

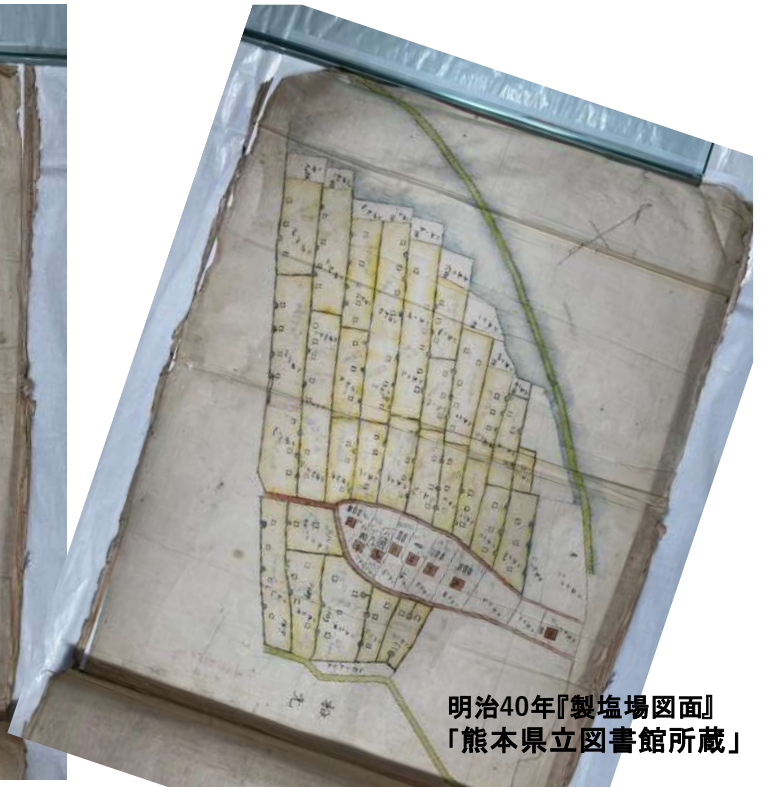


図Ⅲ－3 水俣の塩田（明治40年）全体

図Ⅲ－4は、字別に近い小区画での塩田の様子である。道路、潮溝、ボヤと推察できる表記もある。この図では、残念ながら百間塘の近くの塩田（下浜）、潮溝、ボヤは描かれておらず、隣の字、朱利神での塩田、ボヤは確認できる。朱利神、馬刀湯の西端にあるボヤ前の潮溝は丸島湾の入江に向かっていているように推察できる。大廻塘と亀の首の間に入り込んでいる入江（スプーン状）は、直接不知火海からの海水が塩田に向かって入り込んでいる状況であり、その入江の両端は土手になっていたと推察でき、塩田との境のどこかに、樋門があると推察できる、図面上は各何できない。外浜の大廻塘の陸地側の潮だまり（遊水地）は現在の遊水地と同じと推察できるが、図上の右側の潮だまりは現在は埋め立てられている。外浜は、内浜の塩田開発の100年後の干拓と大廻塘の造設によって造成されたものである。大廻塘の樋門については後で考察する。



図Ⅲ－4 水俣の塩田（明治40年）の字別でのボヤの位置、潮溝、塘の分



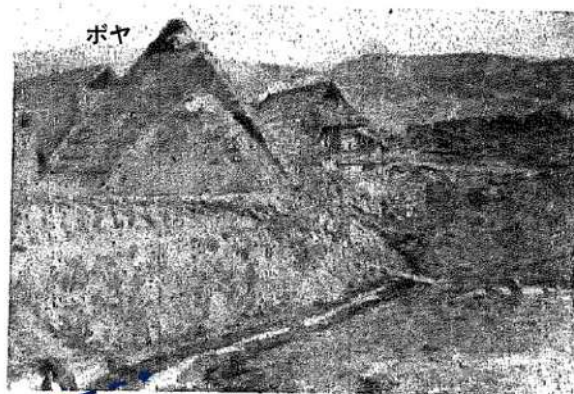
明治40年『製塩場図面』
「熊本県立図書館所蔵」

図Ⅲ－5 外浜と松元の塩田（明治40年）



明治40年『製塩場図面』
「熊本県立図書館所蔵」
上記を加工

図Ⅲ－6 水俣の塩田（明治40年）の字別の図の合成（実際のスケール、形状との相違がみられる）



図Ⅲ－7 水俣の塩田でのボヤと潮溝の

潮溝

ボヤと呼ばれていた塩焼小屋

水俣市史

(3) 塩田の経営状態、経済性

1) 近世の水俣・浜村

かつて、水俣に塩田が存在し、江戸時代から明治の終わりにかけて製塩が行われていたことは、新旧の『水俣市史』や『聞書 水俣民衆史』にも記述がみられるが、改めて水俣の塩田の経営状況や経済性について整理しておきたい。

塩田が存在した一帯は、江戸時代には葦北郡水俣手永のうち浜村に属していた。1633（寛永10）年の「芦北郡人畜改帳」によれば、浜村の村高は181石余、人数は556人であった。同じく水俣手永に属した陣内村の場合は、村高1300石余、人数は836人であったから、村高に対して人口が多いことが浜村の特徴である（表Ⅲ-1）。

表1 水俣手永のうち7か村の田畠高・人数・牛馬数・屋敷数・家数

	陣内村	小津奈木村	長野村	深河村	葛渡村	袋村	浜村
田畠高（石）	1300.3998	534.3187	173.0386	1015.8748	930.69756	552.53422	181.4155
人数（合計）	836	174	88	*397	319	217	556
内訳							
女	368	74	36	158	124	89	233
男	468	100	*52	*139	195	128	323
庄屋	1						2
頭百姓	13	5	3	6	7	12	3
脇百姓	88	20	1	39	30	10	3
水夫（れうし・しほやき）							66
むす子	98	19	10	37	37	22	87
15より下の子供	122	29	11	61	44	33	93
名子	43	10		32	24	15	27
下男	17			5	3		5
作子	45	8	6	29	35	21	8
おぢ	33	9	6	30	15	15	28
家大工	1						
船大工							1
鍛冶	2						
こんや	1						
一向坊主	4						
牛	44	10	4	16	24	7	4
馬	56	6	1	32	23	19	20
屋敷地数	152	28	14	62	56	37	81
家屋数	324	63	42	177	164	67	194
屋敷地の面積	6町7反14歩半	1町1畝6歩半	7反5畝2歩	3町7反3畝18歩半	2町8反7畝28歩	1町4反5畝21歩半	2町7反9畝28歩半
内家屋の面積	9反2畝7歩	1反3畝29歩半	1反11歩	4反4畝7歩	3反4畝29歩半	1反7畝20歩半	4反8畝10歩
1世帯あたりの石高（平均）	8.56	19.08	12.36	16.39	16.62	14.93	2.24

寛永10（1633）年「芦北郡人畜改帳」をもとに作成。

注1 *を付した数値は内訳の合計と合わないが、史料の記載どおりとした。

注2 浜村の数値には舟津村の分も含んでいる。

村高が小さい浜村では、それらの人口をどのようにして養っていたのか。おそらく、浜村の人びとは、漁業や舟運など、農業以外のさまざまな生業に従事していたのであろう。18世紀後半の儒学者亀井南溟は、『肥後物語』に「薩摩ニ堺タル所ニ水俣ト云処アリ、是処ハ船附ニテ家数モ五六百アルベシト見ヘタリ」と記しており、当時の水俣が港町として栄えていたことを推測させる。

「芦北郡人畜改帳」の浜村の項目には、百姓のほか、水俣手永の他の村々にはみられない「水夫（れうし・しほやき）」が登録されている。このことから、江戸時代初期には、水俣で塩焼き＝製塩が行われていたことがわかるが、製塩の形態等については不明である。

2)馬刀潟の開発と塩田

水俣における塩田・製塩の最初の画期は、17世紀後半の馬刀潟の開発であろう。熊本藩では、藩ないし重臣等による開発を「御開」といい、1668（寛文8）年に、八代郡鹿島、玉名郡長洲、宇土郡網津村、芦北郡馬刀潟・日奈田における干拓事業がこれに当たる。

また、19世紀半ば以降に作成されたと考えられる「深水氏先祖附」によれば、1667（寛文7）年2月から、浜村の馬刀潟を中心に新地としての開発が始まった。この時、四十間塘と百間塘が築かれ、田畑28町余、塩浜（塩田）17町9反余りが造成された。人びとの生活が豊かになり、家数も増加したという（「寛文七年二月水股海辺馬刀潟新地見立、四拾間之塘及百間之塘築立候ニ付、田畑貳拾八町余、塩浜拾七町九反余出来致シ、浜村モ此御開出来後自然人民生活有附、戸数モ相増候」）。

従来、馬刀潟の開発は、水俣手永の惣庄屋水俣吉左衛門頼秋らによるものと説明されてきたが、江戸時代初期に熊本藩が主導して行った新田開発の一環であった可能性もあろう。その後、1697（元禄10）年には、「葦北馬刀潟・日奈田開所」は新地方に編入された。宝暦の地引合（検地）では、新田畑と塩浜は「新地」と記載されたから、おそらく馬刀潟の塩浜も検地帳には「新地」として登録されたのであろう。

なお、海辺の新開地は御郡方の管轄で、「井田衍義」には塘の整備についての規定がみえる（「海辺之新開仕塘成就之上御郡方ニ受込候儀、新塘波請之石垣其外格好古塘同前に合い調、右開地に根付儀五ヶ年無別条通り候ハハ、六ヶ年目方御郡方ニ請取、古塘同前ニ沙汰可仕候」）。海岸を埋め立てた干拓地は高波の被害を受けやすく、水俣の塩浜も例外ではなかった。天保14年には強風により発生した高潮で新塩浜の塘が決壊し、馬刀潟を含む内浜まで海水が入り込むという被害に見舞われている（細川家文書「強風高潮之節 海辺塘切絵図」、崇城大学図書館所蔵「天保14年強風高潮之節海辺塘絵図其の一」、図Ⅲ-8）。製塩が水俣にもたらした利益は大きかったが、塩田の施設を維持するための努力も必要であった。



図Ⅲ－8 崇城大学図書館所蔵「天保14年強風高潮之節海辺塘絵図其の一」（崇城大学図書館編集『崇城大学図書館所蔵肥後干拓資料（軸物）調査報告書』より）

3)新塩浜（外浜）の造成

1797（寛政 9）年には、馬刀潟の新地の北側に新たに 19 町 9 反余りの塩田が造成された。この塩田は「新塩浜」「外浜」と呼ばれた。これに対して、17 世紀半ばに馬刀潟周辺で開発された塩田は「古浜」「内浜」と呼ばれたらしい。『肥後国誌』によれば、両塩田を合わせた面積は 44 町余りになったという（「丸島ヨリ塘ヲ築キ、近年墾田塩浜四十四町余也、旧ハ入海ニテ馬刀潟ト云シ所、塘ヲ百間塘ト云、此新塩浜ニ塩竈明神ノ祠アリ、神躰束帯ノ形里俗伝テ融ノ大臣ヲ祀ルト云、又三町余日奈田墾田アリ」）。

熊本大学附属図書館収蔵の「町在」によれば、新塩浜の普請には、水俣手永惣庄屋をはじめ、葦北郡の地侍や村々の百姓・漁師らが金銭や資材、労働力を提供していたことがわかる。なぜこの時期に、費用と人員を投入して水俣に新たに塩田を開発する必要があったのか、その理由については明らかではないが、可能性のひとつとして、1792（寛政 4）年の雲仙岳の大噴火に起因する津波災害、いわゆる「島原大変肥後迷惑」の影響が考えられる。噴火が引き起こした眉山の山体崩壊により、有明海では大津波が発生した、熊本藩の宇土・飽田・玉名郡の広範囲で塩田が壊滅し、藩内では夏ごろから塩が不足・高騰するようになっていた（『藩法集』）。塩の値段は寛政 6、7 年にはいったん落ち着いたようだが、1800 年代になっても、塩田の荒廃による慢性的な塩不足は続いていたようである。水俣の新塩浜の造成は、このような藩内の塩不足に対応するために実施された可能性も考え得る。この点に関しては、さらなる検証が必要であろう。

4)塩田経営の実態

江戸時代の塩田経営の実態を具体的に明らかにしうる史料は少ないが、米国議会図書館所蔵の「水俣手永馬刀潟新塩浜塘手左屋石垣乱杭出来繪圖」は、新塩浜の形状がわかるだけでなく、塩焼き小屋（ボヤ）や塩田の持ち主の名前が書き込まれた貴重な史料である。同絵図は寛政 9 年以降に作成されたものと考えられ、18 世紀末の新塩浜には塩焼き小屋 11 軒、塩田 48 枚があったことがわかる。また、絵図に書き込まれた人名から、新塩浜の塩田の持ち主は 18 名と推測できる（表Ⅲ-2）。

表2 水俣新塩浜の塩焼き小屋・塩田所有者 ※寛政9（1797）年以降

No.	人名	塩焼き小屋（軒）	塩田（枚）	備考
1	茂兵衛	1	8	間茂兵衛か（寛政11：御郡代直触）
2	前田	1	—	地土の前田覚右衛門か（寛政11：御郡中井樋見ノ塘方助役）
3	覚右衛門	—	2	
4	小右衛門	1	—	
5	茂助	1	4	
6	長兵衛	1	4	
7	深水	1	—	深水、東は地土か
8	東		—	
9	藤兵衛	1	—	
10	幸右衛門	1	2	
11	儀八	1	—	
12	十次郎	2	6	十次郎・清八両名で3枚
13	清八	—	2	
14	茂三	—	3	
15	寿助	—	3？	塘の外側に1箇所記載あり。水俣会所小頭か
16	小右衛門	—	1	
17	佐左衛門	—	3	佐左衛門・喜左衛門両名で3枚
18	喜三左衛門	—		
／	不明	—	6	
	合計	11	48	

1798（寛政 10）年の年紀がある「徳富茂十郎内分記録」には、水俣手永に隣接する津奈木手永の村々の百姓が、「水俣馬刀潟」の塩浜での日雇仕事に就くことを戒める文書が載っている。実際の製塩作業には、水俣やその周辺の百姓が日雇いの賃仕事として従事していたのであろう。明治期でも製塩は芦北・水俣の村々にとって貴重な現金収入であったが、浜村では塩浜と農業を兼業していたので、自作農が多かったという（『聞書 民衆水俣

史』)。

熊本県立図書館所蔵の『製塩場図面』は、1907（明治 40）年の年紀があり、水俣で製塩が廃止される直前の塩田の状況が判明する史料である。釜屋の位置や持ち主（＝製塩者）、塩田 1 筆ごとの形状書き込まれており、水俣の製塩の歴史を知る上で非常に重要な史料である。塩田は、字「松ノ元」「外浜」「三本松」「中道」「四十間」「平浜」「馬刀潟」「朱利神」「梅林」「梅道」に広がっており、釜屋は合計 104 軒、のべ 64 人の製塩者の名前が記載されている（表Ⅲ－3）。なお、「朱利神」という字名は、1855（安政 2）年の「水俣馬刀潟古浜御年貢塩取立御帳」に「しゆり神台」とみえる。

表Ⅲ-3 明治期の釜屋・製塩者一覧（1907 年）

字	釜屋 番号	製塩者	備考
松ノ元	1	坂本駒次	
松ノ元	2	濱崎国次／坂井源次郎	
松ノ元	3	川口安太／小形恵市	
松ノ元	4	淵上清市	『熊本県富貴名鑑』に「淵上清一」
松ノ元	5	有村廣吉／田中市平	
松ノ元	6	塩崎寅吉	M42『富貴要鑑』
松ノ元	7	深水寿作	
松ノ元	8	緒方米次／梅崎伊平／深水順平	
外浜	9	梅下藤四郎	
外浜	10	志水徳平	
外浜	11	山下勘太	
外浜	12	志水改蔵／江口甚吉	
外浜	13	本田銀次郎	
外浜	14	窪田権七	
外浜	15	廣田熊吉／中村廣吉	廣田：M42『富貴要鑑』
外浜	16	江口嘉市	
外浜	17	井川清太郎／井川徳次	
外浜	18	谷口久蔵／竹下吉平／小形善三	
外浜	19	□□貞吉	
外浜	20	□□□	
外浜	21	田中栄次	
外浜	22	平田幾太	
外浜	23	石塚長三郎／窪田藤四郎	
外浜	24	小池吾平	
外浜	25	廣島才太	M41『富貴要鑑』・T8『熊本県富貴名鑑』
外浜	26	間茂七	
外浜	27	梅崎忠治郎／廣田利三郎	
外浜	28	廣田茂作／坂本金三	
外浜	29	園村文吉／塩崎米吉／中村甚平	

外浜	30	田中政吉	
外浜	31	坂本留次	
外浜	32	窪田源七／窪田長平	
外浜	33	深水亀太郎／斉藤才太(抹消)／向田傳次郎	向田：T8『熊本県富貴名鑑』・T14『所得便覧』
外浜	34	有居□□	
外浜	35	渡辺政次／上村嘉市	
三本松	36	中村喜七／橋本芳太郎	
三本松	37	橋本茂七	
中道	38	平上太蔵	
中道	39	□中傳次□	
中道	40	中村与太郎	
中道	41	前島源吉	
四十間	42	小形利作	
四十間	43	山本藤作	
四十間	44	江口傳次郎／中村嘉久次(追筆)	
四十間	45	中村嘉久次(抹消)／田中長吉	
四十間	46	江口角平	
四十間	47	坂本牧太	
四十間	48	徳富武七	
四十間	49	廣田喜作	
四十間	50	徳富惣四郎／□□吉次	
四十間	51	栄永平吉／溝口傳七／坂本寿作	
四十間	52	北角岩吉	
四十間	53	松本角次／廣田嘉久次	
平浜	54	大川才駄／□□宅平／□□□郎	
平浜	55	栄永丹蔵／同亥之吉／田中源四郎	
平浜	56	坂本甚作	M31『第二回水産博覧会褒賞人名録』・M36『第五回内国勸業博覧会出品目録』・M42『富貴要鑑』
平浜	57	池田安平／神崎五太	
平浜	58	前田平次／□□□□／□□□□	
平浜	59	(破損につき不明)	
平浜	60	坂本安太／坂本善平	
平浜	61	中村庄次郎	
平浜	62	有村栄蔵	
平浜	63	田中才蔵／中村平三郎	
平浜	64	川崎貞吉	
平浜	65	坂本久米吉／栄永庄八／田中八百吉	
平浜	66	栄永□三	
平浜	67	西田惣市／有村茂七	

平浜	68	□□作平	
平浜	69	坂本兵三郎	
平浜	70	栄永嘉市／中村善吉	
平浜	71	有村儀三郎	
平浜	72	尾口仁平／坂本増太	
平浜	73	蓑田仙太郎／村山寅作	蓑田：M42『富貴要鑑』・T8『熊本県富貴名鑑』
平浜	74	田中武七／江口勝次	
馬刀潟	75	栄永兵吉	
馬刀潟	76	坂本嘉伊太	
馬刀潟	77	迫田金ノ十	M36『第五回内国勸業博覧会出品目録』
馬刀潟	78	鋤田新□／□□□吉	鋤田新平か：『第五回内国勸業博覧会出品目録』
馬刀潟	79	(破損につき不明)	
馬刀潟	80	志水十太郎／〃 孫平	
馬刀潟	81	津下茂作／谷口茂市／津下喜平	
朱利神	82	淵上茂次郎／平尾利喜太	
朱利神	83	尾口三蔵／津下茂市	
朱利神	84	村山彦市／福岡茂市	
朱利神	85	園田新蔵／前田儀三郎	
朱利神	86	坂本三蔵／山本彦四郎	
梅林	87	松下弥市／前田清市	
梅林	88	平上新吉／坂本太次郎	
梅林	89	前島徳次	M36『第五回内国勸業博覧会受賞人名録』
梅林	90	田上源七	
梅林	91	尾口利喜太	
梅林	92	前田喜平次	M42『富貴要鑑』・T8『熊本県富貴名鑑』
梅林	93	苗床茂市／福田久太郎	苗床：M36『第五回内国勸業博覧会出品目録』・T8『熊本県富貴名鑑』
梅林	94	斉藤魚太郎	M36『第五回内国勸業博覧会出品目録』に「斉藤熊太郎」
梅林	95	森八百彦／田中平吉／西田吉平	
梅林	96	山本新蔵	
梅道	97	植田金七／前島三蔵	
梅道	98	前田太八／村田喜七	
梅道	99	前田清蔵	
梅道	100	田口友次／石場三蔵	

梅道	101	坂田彦作	
梅道	102	小形喜□／田中留次	
梅道	103	□□□次／□□徳□	
梅道	104	(破損につき不明)	

明治 40 年代の製塩者の中には、高額納税者を集めた『熊本県富貴名鑑』『富貴要覧』に名前が掲載されていたり、水産博覧会や内国勸業博覧会に塩を出品している人物も確認できる。明治期になっても、水俣では一定の規模で塩が生産され、利益をもたらしていたといえよう。

1900（明治 33）年度の『熊本県水産試験場報告』によると、この時期の水俣では、砂を撒き広げたり、集めた鹹水を煮詰めたりする作業は分業ではなく、家族総出で従事していたという。また、広島県の松永塩田や天草の楠浦の塩田では、濃縮した海水を煮詰めるために石釜を使用していたが、水俣では縦横 8 尺、深さ 3 寸の鉄釜を使用していた。1 日に焚くことができた釜はおおよそ 5～6 釜で、1 釜につき約 7～8 斗の塩が取れた。なお、松永塩田や楠浦では、釜を焚く燃料として石炭を利用していたが、水俣では鹿児島県の長島や芦北郡内から調達した松葉や雑木枝葉を使用していた。明治期に専売局が行った調査によると、水俣の塩田の 1 年間の平均生産量は 148 石 8 斗、重さにして 2 万 550 斤（1 斤＝600 g）であった。（『大日本塩業全書 第二編』）。

5) 水俣塩の流通範囲

水俣で生産された塩の販売については、1907（明治 40）年発行の『大日本塩業全書』に詳しい。同書によれば、生産された塩のうち、4 分の 2 は水俣村の間屋仲買人が店舗で販売し、4 分の 1 は製造場で直接行商人に引き渡された。水俣の塩は、地元で販売・消費されたほか、熊本県内では熊本市をはじめ、飽託・八代・宇土・益城・天草郡、佐賀県では佐賀・神崎・小城郡に販路があった。また、鹿児島県内では、水俣に近い出水郡米ノ津や山間部の伊佐郡山野・大口地方まで販売されていた。大口では、塩 1 俵と米 1 俵が交換されたという（『日本塩業大系 特論民俗』）。塩の販売の季節は、1、7、8、9 月が 6 割を占め、主に醤油の仕込みや、肥前特産の素麺製造に用いられた。参考として、1902（明治 35）年から 1904（明治 37）年に水俣で生産された塩の、浜相場を表Ⅲ－4 に示しておく。

表Ⅲ－4 水俣塩の浜相場

年	1 石あたり（円）	1 升あたり（円）
1902	1.660	1.021
1903	1.600	0.020
1904	1.300	0.017

『大日本塩業全書 第二編』をもとに作成。

水俣の塩の販路について、薩摩国内での販売は江戸時代までさかのぼる。肥薩国境にあった小川内番所（現・鹿児島県伊佐市大口）にあった関所の出入りを記録した「御番所出入改帳」には、1861（文久元）年の 11 月に、肥後水俣陣内村の吉平、末吉が塩の行商のために関所を通過したことが記録されている（『大口市郷土誌 上巻』）。大口地方には、正月二日に水俣から「若塩売り」がやってくるという風習もあった。「若塩売り」とは、九州などでみられる正月を祝う慣行の一種で、家々に潮水や塩を配り、その代わりに祝儀をもらうというものである。本来、「わかしお（若潮・若塩）」とは、正月に神前に供えるために元日の早朝に海から汲んできた海水や、その海水を汲む行事を指すが、海から離れた地域や山間部では、正月に商人や芸能者が海水の代わりに塩を届けてまわる風習がみられた。「若塩売り」は、内陸部の村々に新年の訪れを告げる存在であった。

また、鹿児島県出水郡大川内村（現・出水市）では、水俣の丸島のから来た塩売りを新生児の「ヤシネオヤ」にする風習があり、これを「シオトト」「シオテチュ」と呼んでいた（柳田国男『山村生活の研究』、『日本塩業大

系 特論民俗』)。塩売りなどの外来者などを仮の親とすると、子どもが丈夫に育つという考え方は日本各地で見られる風習であるが、水俣は塩を介して、さまざまなかたちで他の地域とつながっていたといえよう。

表Ⅲ-5 水俣の塩田略史

西暦	和暦	できごと
1633	寛永 10	浜村に「れうし・しほやき」が 66 人居住
1667	寛文 8	四十間塘・百間塘を築き、馬刀潟に新地を造成（田畑 18 町余、塩浜 17 町 9 反余）
1697	元禄 10	葦北馬刀潟・日奈田開所が新地方に編入
1797	寛政 9	馬刀潟の外側に大廻りの塘が築かれ、新たに塩浜が造成される（新塩浜 19 町 9 反余）
1798	寛政 10	この頃、津奈木手永の百姓が馬刀潟の塩浜で日雇の仕事に従事
1905	明治 38	塩が専売制となる
1909	明治 42	水俣で製塩が廃止となる

(4)塩田跡地の空間構造

明治 40 年の製塩場地図を現在の地図に重ね合わせた（図Ⅲ-9）。明治 40 年の地図が多少不正確である点を考慮して、外浜、大割塘の形状は比較的正確であることからそれを基準に一部修正して、古賀から丸島への道路（中道）も重なる。ただ現在の丸島樋門から塩釜神社に至る入江（スプーン状）と現在の排水路との重ね合わせは正確ではない。塩田西端の朱利神、馬刀潟の潮溝の南端に位置する百間塘の内側の湿地とのつながりも確認できる。丸島港の西側の入江と潮溝のつながりは不確定である。

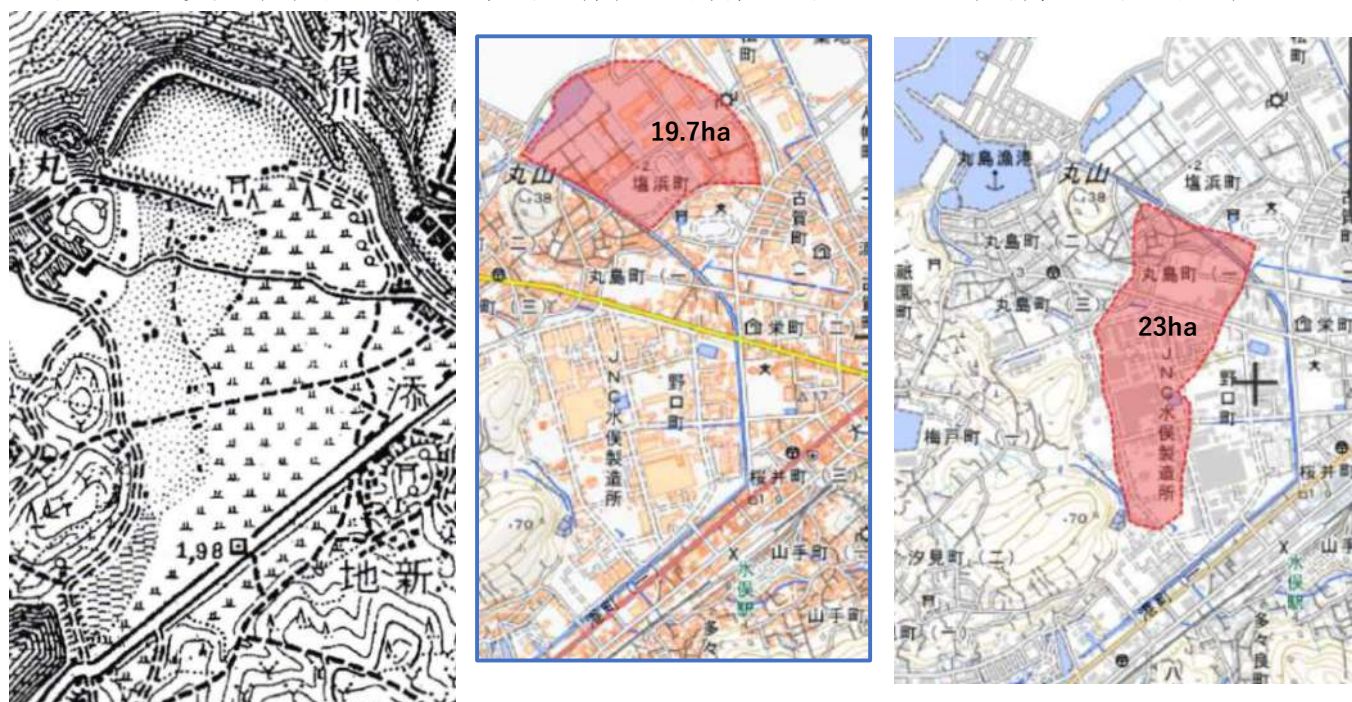


図Ⅲ-9 現在（左）及び明治 34 年地図（右）に明治期塩田図を重ねた（一部、塩田図の修正）

明治40年の製塩地図より前の明治34年地図（国土地理院）では、塩田及び水田の土地利用を確認できる。現在の地図に重ねるとチッソ工場地は塩田及び水田の跡に造成されることが分かる（図Ⅲ-10）。明治34年での塩田面積は、外浜で約20ha、内浜で約23haである（図Ⅲ-11）。先の開発の歴史に書いたように、1667年頃の最初の開発で内浜に相当する箇所での塩田は17町9反（約18ha）で、1797年に外浜として大廻塘に19町7反（約20ha）造成された。この面積とほぼ一致する。外浜は明確に一致するが、内浜は多少増加しているようではある。ただ、百間塘の内側は塩田ではなく湿地の土地利用となっており、土地条件から塩田化することが難しかったのかとも推察する。



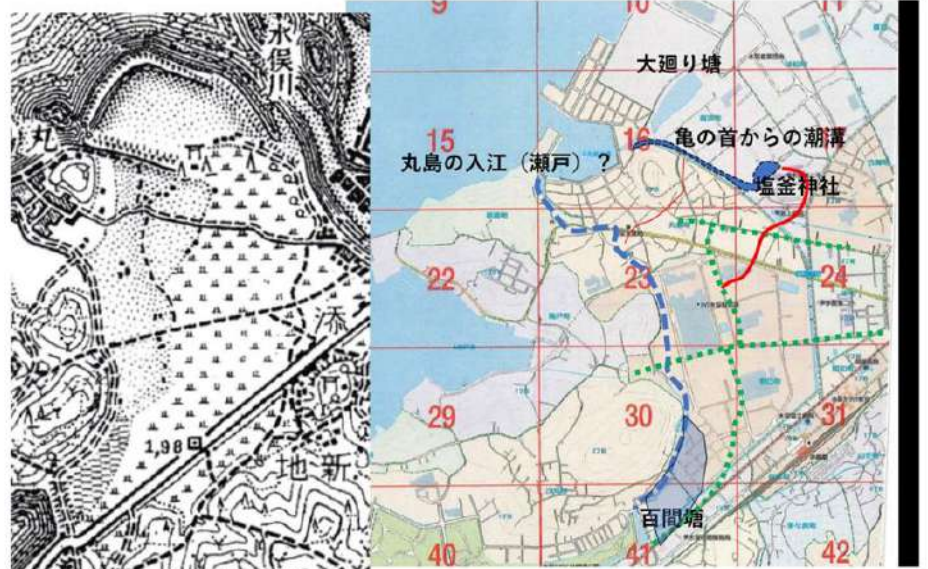
図Ⅲ-10 現在（左）及び明治34年地図（右）に明治期塩田図を重ねた（一部、塩田図の修正）



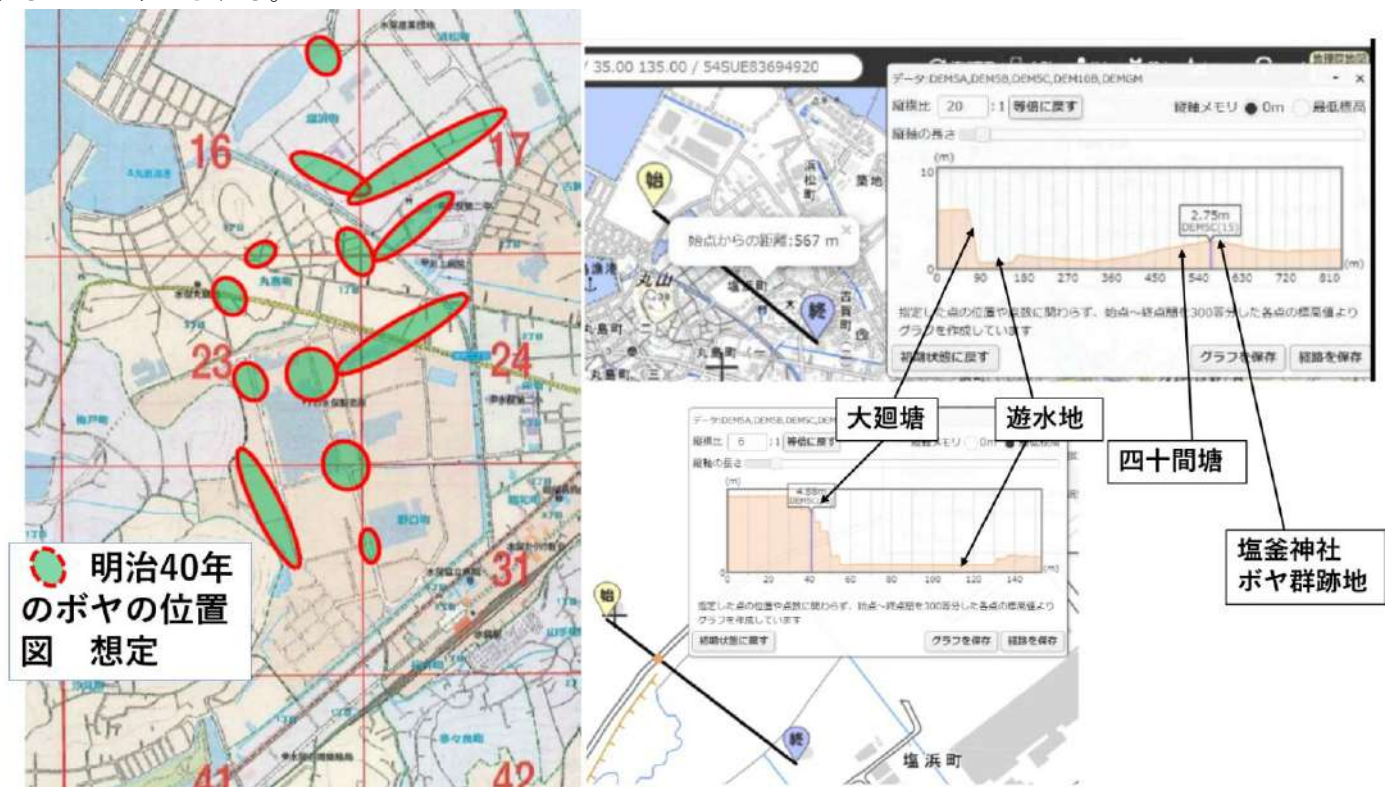
図Ⅲ-11 明治34年地図における塩田（外浜と内浜）の面積推計

明治34年地図には塩田の西端で百間塘から丸島港西端の入江に向かう道が明記されており、この道沿いに塩田用の潮溝が引かれていたと推察できる。潮溝は入浜式塩田においては基幹的インフラであることから、西端の南北をつなぐ潮溝の確定、及び丸島港の入江の位置と大きさ、及び樋門の確認、百間塘と樋門、そして湿地（潮だまり？）の確定が残された課題である。現在は一部チッソ敷地内であることもあり、明確の痕跡を確認するには至っていない。外浜の南端は丸島港の東からの入江がスプーン状に四十間塘、塩釜神社に至る（図Ⅲ-12）。この入江の西端には樋門はなく（現在は丸島排水路の樋門はある）、小舟が四十間塘のあたりまで出入りしていたと推察できる。それは、製塩した塩の運搬、及び製塩用の薪の搬入に使用したとも推察する。外浜の樋門に関しては、後で、大廻塘の考察時に述べる。

図Ⅲ-12 明治34年地図と明治40年の製塩地図から読んだ、塩田のための入江と潮溝の位置



ボヤは塩田の位置より小高い地面に建設されていたと推察し、その位置を現在の地図にプロットした（図Ⅲ-12）。現況でどの程度の微高地となっているかは今後の分析が必要である。また、断面図を国土地理院地図から作成したが、外浜での大割塘から塩田における断面は明確に塘と塩田の断面構成が明確にうかがえる。後で、大廻塘の断面構成を述べるが、大廻塘とその直下の潮だまりの文化遺産的価値を詳細な現地調査で明確にすることが求められる。



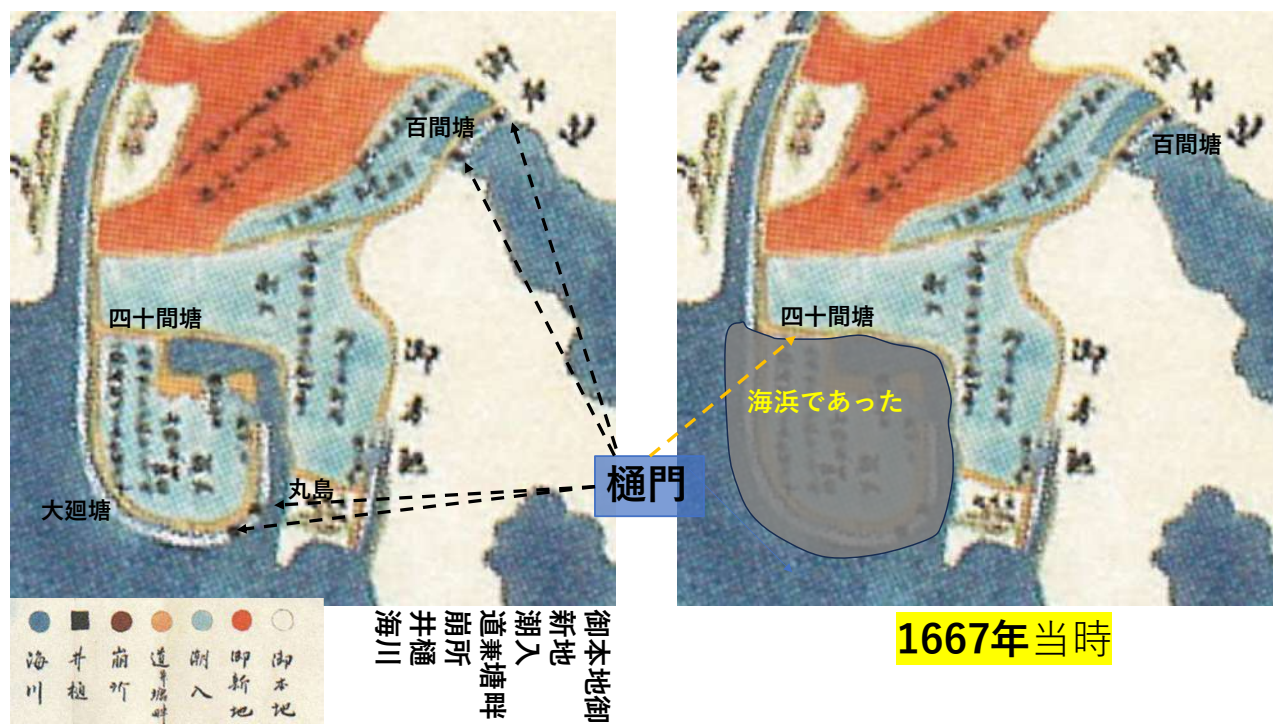
図Ⅲ-12 明治期の塩田ボヤの位置を現在の地図にプロット（推計）図（左）、断面高低差（右）

先に紹介した天保 14 年（1843 年）の強風高潮被害図で水俣の塩田部分を拡大したものが図Ⅲ-15 である。左図は天保 14 年の図であり、右図は 1667 年当時でまだ大廻塘がなく、外浜は海・浜であったと推察し、四十間塘が防潮堤防として整備されていたと推察した図である。左図では先に考察した百間塘から丸島港の西端の入江にいたる道が描かれている。百間から丸島に至る潮溝も道に沿って存在していたと推察する。樋門の表記はないが、「井樋」の表記がそれに相当すると思われる。井樋は百間塘に二か所、大廻塘に二か所記入されている。百間塘の陸側には百間港と同様の海の色が塗られており、樋門を介して潮だまりがあったとも推察できる。大廻塘の樋門は、四十間塘に至る入江の入り口にある。この入江には現在あるような樋門、橋も設置されていない。先に述べたように、四十間塘に至る入江が水運用の入江として活用され、樋門と橋も設置は不要としたと推察する。

百間塘の二か所の井樋の機能について明確なことは言えないが、次のように考察する。1667 年頃の干拓の記録では塩田開発と水田開発が同時に実施されていたとある。明治 34 年の地図でも百間塘からの内陸部は、湿地、塩田、田の土地利用となっている。樋門の機能は満潮時の海水の取り入れ機能、及び干潮時での水田や悪水・雨水の排出機能の二つがあると思われる。図の百間塘の右の井樋は水田用の排水樋門、左の樋門は海水の取り入れ樋門とも推察する。ただ、図では潮だまりは一つであり、取水時には海水を貯め潮溝に沿って塩田に海水を配分し、干潮時には主に水田からの排水路（現在は田在川／江添川）を介して樋門から排水していたと推察することも可能か。この点は、塩田の高さが水田の高さより低くければ可能であると推察する。ただ、これらの推察を立証できる文献等は発見できずにいるので推察の域を出ない。大廻塘の二つの樋門の機能も百間塘の樋門と同様な推察ができるがどうか。大廻塘の内側には現在も遊水地（潮だまり）があり、江戸期の図面では潮だまりが二か所ある。この潮だまりの機能は、満水時での塩田用の海水の取り入れ、干潮時の水田からの排水機能を果たしてきたか推察する。

1667 年頃に開発された塩田において四十軒塘から丸島港に至る箇所における防潮堤防か浜の構造については不確かである。亀の首の西側に塩田があったと推察できるが、その場合には防潮堤としての塘は無かったのかという疑問が残る。今後の調査が必要となっている。

天保十四年強風高潮之節海辺塘切絵図其の一 の一部 1843年 崇城大学図書館所蔵絵図

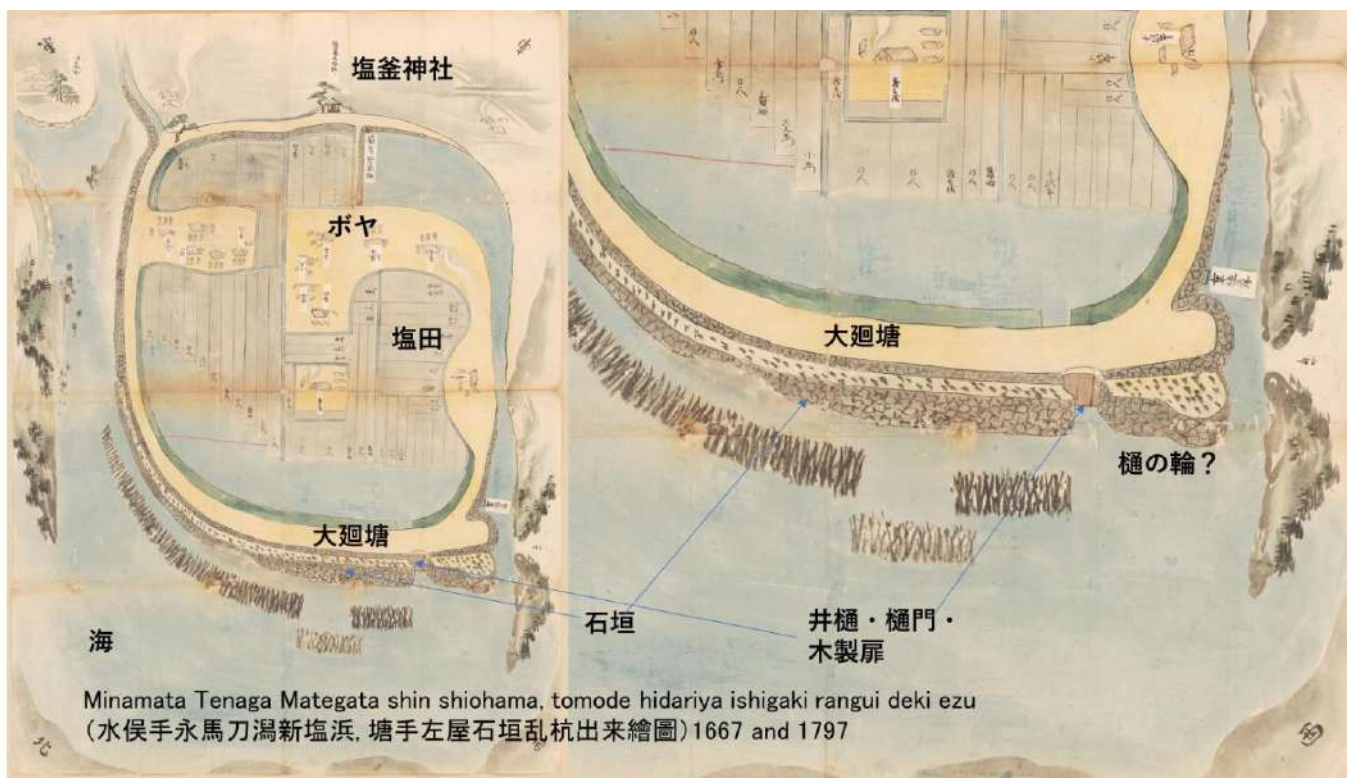


図Ⅲ-15 左図は天保 14 年の塩田の被害状況及び、塘、井樋（樋門）の位置図。右図は 1667 年頃の最初の塩田開発の状況推察

2)大廻塘と樋門

塩田時代の大廻塘の構造はどうであったか。図Ⅲ-16は米国のWEB上で見ることのできる「水俣手永馬刀潟新塩浜、塘手左屋石垣乱杭出来繪圖」で、大廻塘の様子が描かれている。1667年とあるが、大廻塘の築造は1779年であることから、1779年が正確である。この絵図には塩釜神社の松、三本松が描かれ、大廻塘の陸側には潮だまりがあり、その奥に塩田とボヤがある。塘の海側には防潮の役割を果たすと思われる粗朶を浜に突き刺して粗朶垣根のような防潮帯が描かれている。その奥に塘の法面を構成する石垣があり、2段の石垣であり海面に近い団は土ではなく石を敷いているようにも見える。何のために2段の構成となっているかは不明であるが、海からの波の圧力の低減効果か、あるいは法面石垣や塘の上部の道の管理等のためとも想定できる。現在は残念ながら大廻塘の海側の護岸はチッソが埋立て、近年はメガソーラーが設置されている。ただ、陸側の潮だまりは残されており、その護岸の構造を調査することは可能である。

石垣の一端が切られ門扉がみえる。これが井樋／樋門の扉と推察できる。樋門の奥は潮だまりとなっている。樋門の右側で入江の入り口のあたりに丸い突起形状の平らな石垣段がある。これは、樋門への波の力を除けるための樋の輪といわれる構造物と推察する。この図は、大廻塘が非常に丹念に構築されていたことを示し、それだけの土木技術の智慧とそれを実現するための財力・力があつたとも推察する。また、現在は丸島樋門がある箇所には樋門がなく入江が塩釜神社の方に向かっては入り込んでいる。運搬用に使用されていた入江と推察する。その入江の入り口左に、右井樋床と明記された箇所があり、低い樋門が設置されていたと推察する。先の海よりの大きな扉の樋門（左樋門）とこの右樋門の機能はどう異なるのか、海水取水は主に左樋門で、排水用の樋門が左樋門かも推察できるが不明確なままである。現在の大廻塘の状況は写真Ⅲ-1、2に示す通りであり、江戸期の塩田用の塘の様子を示すような景観ではない。唯一湿地がかつての潮だまりの様子を多少とも推察できるかどうかである。2つの樋門に関しても現地で確認することはできない。左樋門はチッソの埋立で隠れてしまっている。右樋門は現在、丸島樋門（排水口）での満水時での内水面氾濫を防御するための調整樋門として、大廻塘の湿地に丸島排水路からの排水を貯めるための調整の役割を果たす樋門の位置と一致しそうではある。現地での塘の調査委調査と合わせて確認する必要がある。



図Ⅲ-16 Minamata Tenaga Mategata shin shiohama, tomode hidariya ishigaki rangui deki ezu
(水俣手永馬刀潟新塩浜、塘手左屋石垣乱杭出来繪圖) 1667年。

<https://www.loc.gov/resource/g7964m.ct011350/?r=-0.132,0.239,1.175,0.461,0>。米国

図Ⅲ-17 は、明治以後の外浜の耕地別所有者の図である。この図では、外浜の入江は塩釜神社までには至っておらず、埋め立てられ耕地化されている。入江の入り口には現在のような丸島樋門と橋は設置されておらず、大廻塘の道は入江の右岸側から回り込んで亀の首の東に至る。入江に面して樋門らしき開口部が遊水地に向かって開かれている。樋門江戸時代の大廻塘の右樋門の位置には樋門があるが、左樋門の位置はずれているようである。図上の上の樋門の先には、細長い台地がある。これは先に提示した樋の輪に相当する箇所かとも推察できる。



図Ⅲ-16 外浜の耕地図（明治以後と推定）



写真Ⅲ-1 大廻塘の道路、左は埋立地、右は遊水地



写真Ⅲ-2 大廻塘の陸側、遊水地。かつて潮だまり



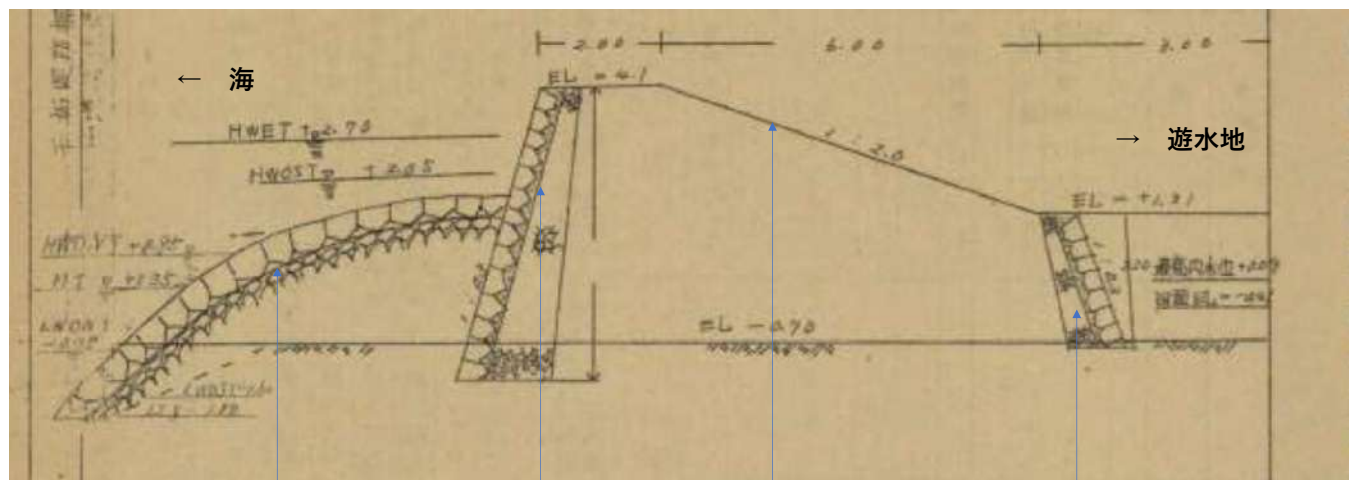
写真Ⅲ-3 大廻塘の右樋門と左樋門の間。かつては現在の樋門の管理小屋があったといわれる。



写真Ⅲ-4 大廻塘の右樋門の箇所と一致する、満潮時の排水の調整機能を果たす遊水地への樋門。

1960年 農林省が作成した『干拓堤防台帳 第2輯 (干拓堤防調査書)』

大廻塘の断面図 (チッソの埋立前)



韃石垣 雑石練積
コンクリート
厚 1.0m?

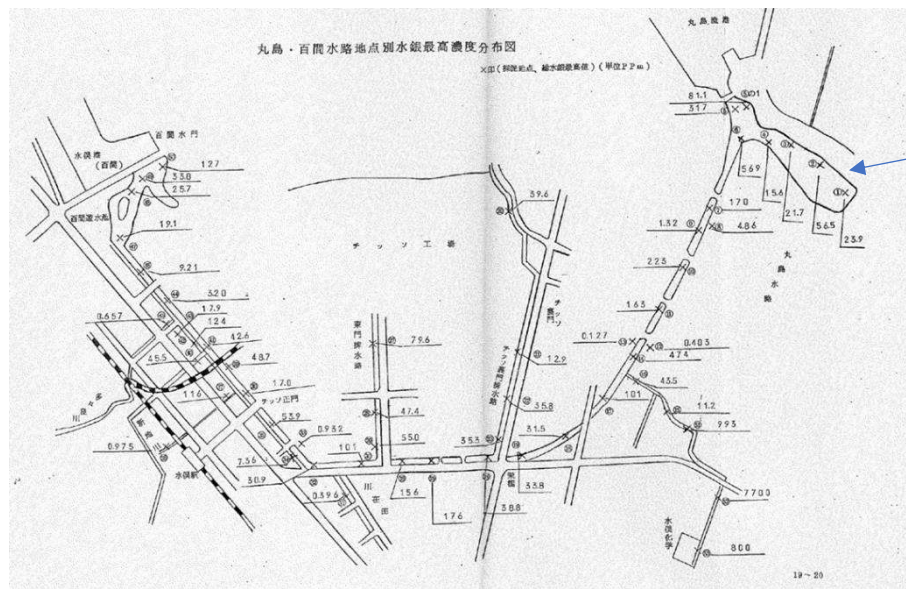
表石垣 雑割空積

盛り土法 筋芝

腰石垣 雑石空積

図Ⅲ-17 大廻塘の構造。左が海側の法面（表石垣と韃石垣）、右は遊水地側の腰石垣。昭和 35 年

大廻塘の構造については、1960 年に全国一斉に農水省が実施した干拓堤防調査書に、大廻塘の報告が参考になる (図Ⅲ-16)。江戸期の塩田時代の石垣と同様かは不明である。先にみた図Ⅲ-16 にある海側に 2 段にみえる石垣ではなく、緩い勾配の韃石垣が海側にあり (刀を垂直に近い表石垣とすれば、それを取める韃の役割としての韃石垣)、韃石垣の上部が多少平とみれば、2 段の石垣とみえなくはないが、不確かである。塘の天端は 2m 幅であり、現在の道路幅よりは狭いが人が通る上では問題はない幅である。緩い 1/2 勾配で遊水地に傾斜する盛り土で芝が載る法面があり、遊水地との見切りは空石積み腰石垣である。この構造に関しては、今後遊水地での現場調査で確認することは可能である。韃石垣は石積みにコンクリートが使用されており、明治以降の改築とも推定でき、江戸期の石垣はその時点で消滅している可能性もある。ただ、遊水地の石垣は空積みであり、江戸期、1797 年頃から約 220 年経過している文化財的価値があるとも推察できる。先に第 1 集資料 (p11) で明示したように、この湿地帯にも水銀が堆積され 1976 年熊本県調査では、総水銀が 15.6~56.5ppm 検出されている個所でもある (図Ⅲ-18)。今後、石垣の構造的調査と合わせて継続的な水銀測定も必要な箇所である。



大廻塘の下の
遊水地

図Ⅲ-18 第1集の再掲。1976年時の排水路、遊水地の総水銀量、単位は ppm
3)外浜の入江と四十間塘

江戸時代には大廻塘の西側の入江は四十間塘、塩釜神社に至っているが、現在は部分的に丸島排水路の位置と一致する。明治40年の製塩図では入江がスプーン状に図化されている(図Ⅲ-19)。現在のグーグル写真で確認すると、塩釜神社前のチッソグラウンドの駐車場の形状と一致していると推察する。駐車場はくぼ地形状であり、符合する。塩釜神社の先には四十間塘がつながる。これらの一連の関連図は、第一集でも紹介した水俣教育委員会作成のスケッチ(図Ⅲ-20)とも符合する。

四十間塘は百間塘と同様に1667年の造設であることから、先に述べたように、四十間塘の先は海浜が広がっていた推察する。塩田用の海水取り入れ口の「四十間樋門」がどこにあったのかを示す図面は発見されておらず、また、その後外濱が造設されたために、現状ではその位置と構造を把握することはできない。今後の課題である。



図Ⅲ-19 外濱の塩田(図Ⅲ-5)



図Ⅲ-20 外濱の西側の丸島からの入江の形状がチッソ運動場の駐車場くぼ地の形状と一致。横に塩釜神社と四十間塘がある。



写真Ⅲ-5 かつての入江後のくぼ地の駐車場

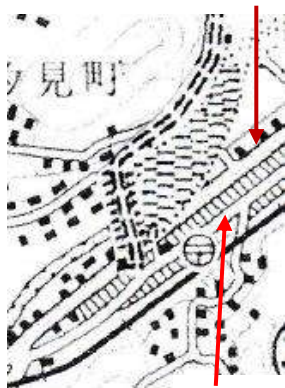


図Ⅲ-21 外濱のイメージ図(水俣市教育委員会資料)

4)百間塘と樋門

現在の百間塘は江戸時代の塩田開発の頃よりは奥の場所が縮小されていることは第1集で述べた（第1集p 8～）。百間塘は旧国道3号線まで、約180m幅で築造されていた(図Ⅲ-22)。現在ではその面影はほとんどない。唯一、百間港に面した樋門、排水口からの景観が百間塘の面影を示すのみである。先に述べたように、百間塘と2つの井樋（樋門）の正確な位置と構造、そして機能（塩田用の海水取水機能と水田用の排水機能）については不明なままである。大廻塘のような図が今後発見されることを期待したい。

新道



旧道

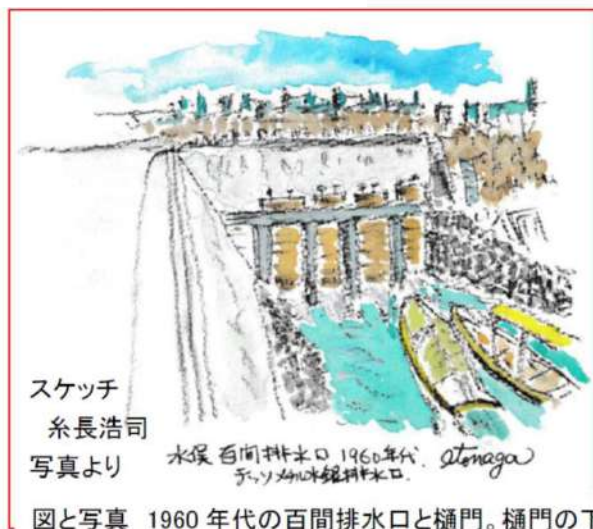
図Ⅲ-22 明治34地図と
平成17年地図の合成、
大廻塘は旧道まである



写真Ⅲ-6 (左) 現在(2024年4月)での旧道から百間樋門に向かう道路(かつての百間樋門道路?)。



写真Ⅲ-7 (右) 現在(2024年4月)での旧道とかつての百間塘道路の交差点



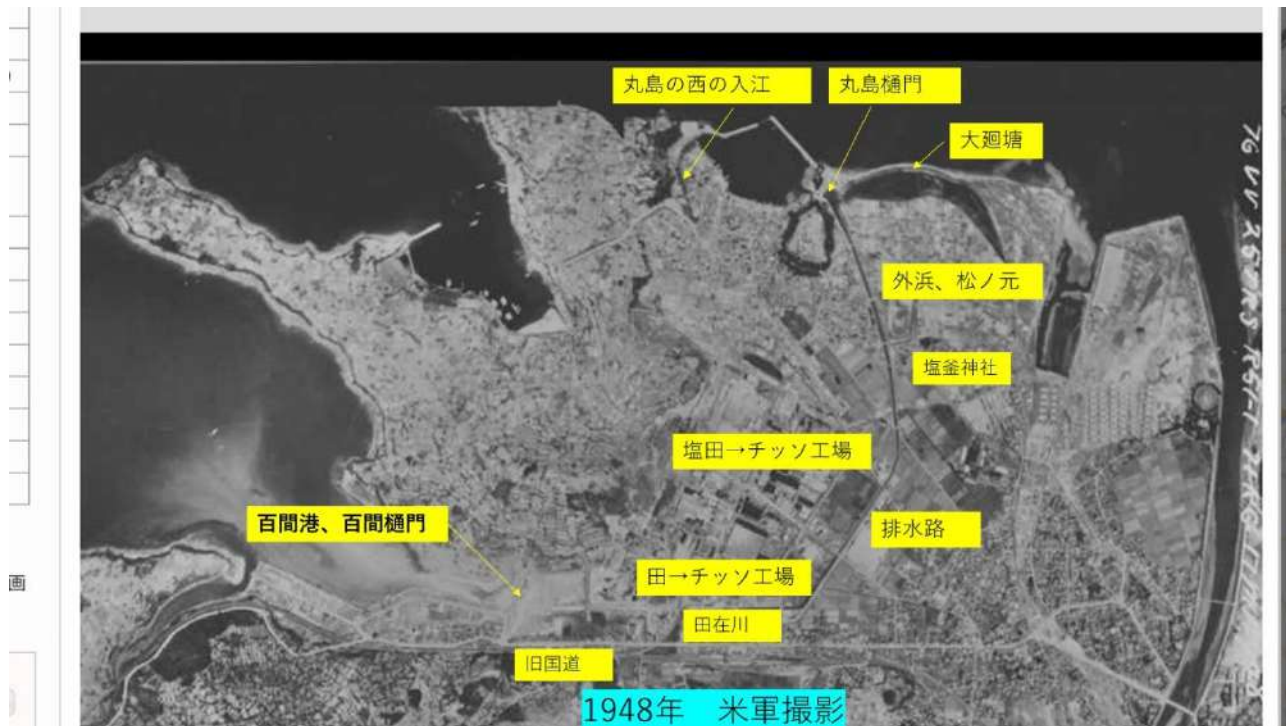
図と写真 1960年代の百間排水口と樋門。樋門の下からの水流の泡立ちは、工場排水が樋門の下から排出していることを示している 漁舟が停留し舟低について貝を汚水で除去か

図Ⅲ-23 (左) 1960年代の百間樋門(排水口)の扉スケッチ。写真Ⅲ-8 同写真

(6)百間樋門(排水口)に至る水系

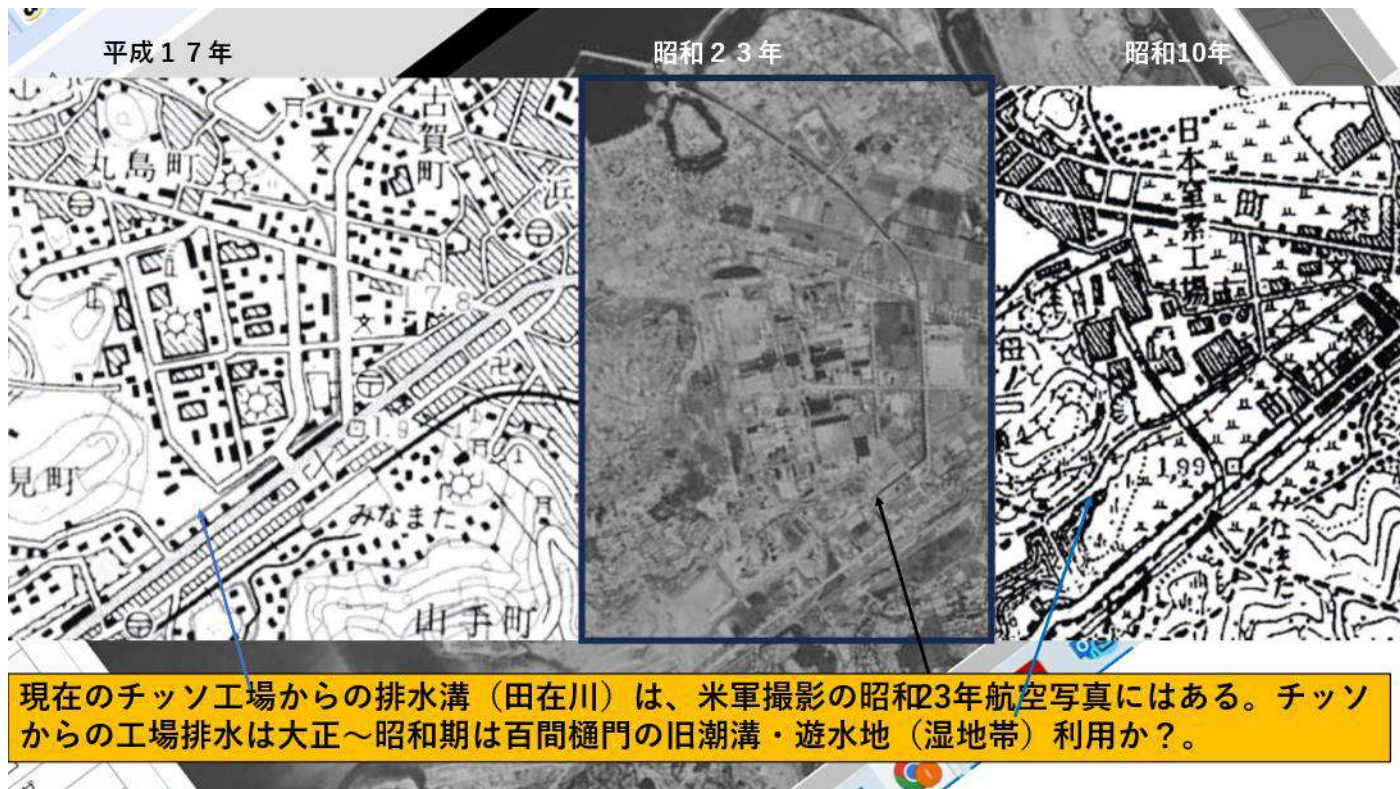
1)チッソ工場からの排水

図Ⅲ-24は、1948年に米国が撮影したチッソ工場周囲の航空写真である。丸島樋門から百間樋門に至る排水路がチッソ工場を取り巻いているのが分かる。また、塩田時代に造成された大廻塘、その下の塩田用の潮どまり(遊水地)も明確に見ることができる。丸島港と比較して、百間樋門の内側の遊水地～百間港に至るエリアは白く濁る状況が明確であり、チッソからの工場排水による影響と推察できる。百間塘が旧国道の方に伸びていることもわかり、百間塘の大きさが推察できる。

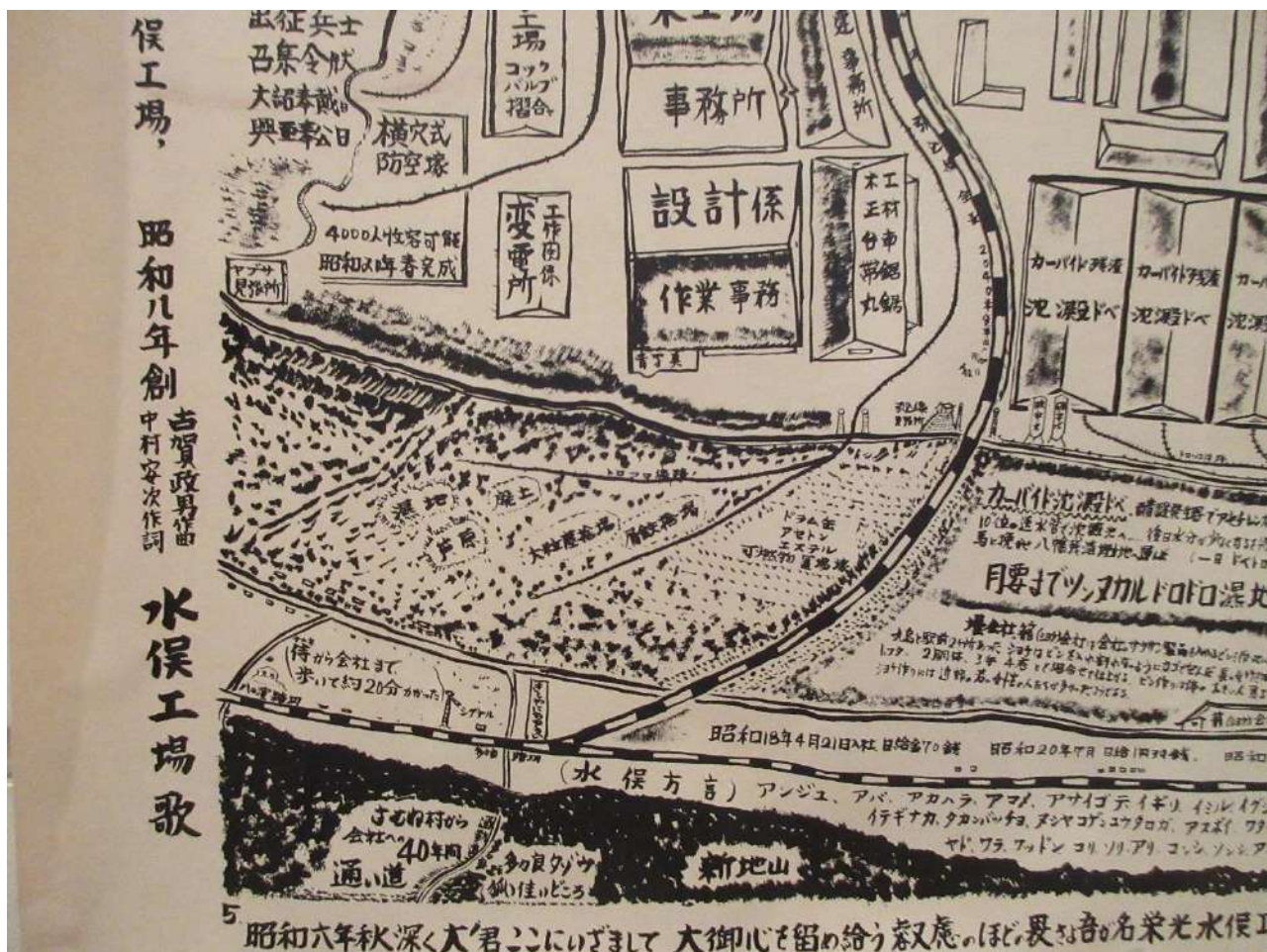


図Ⅲ-24 百間樋門、丸島樋門、チッソ工場を取り巻く排水路等

図Ⅲ-25 は昭和 10 年、昭和 23 年、平成 17 年の地図と航空写真を並べてものである。昭和 10 年の地図にはチッソ工場からの引き込み線が確認できるが、現在ある田在川等のチッソ工場からの排水機能を果たした河川を特定できない。ただ、百間樋門（排水口）の内陸側の湿地から引き込線路に至る水路の曲線が描かれている。その水路横は荒地と水田となっている。昭和 7 年からチッソは有機水銀を百間樋門から排出していた事実を考えると、この曲線の水路がその排水路であるという推察も成り立つ。当時のチッソ工場の正確な施設整備図の入手が必要である。

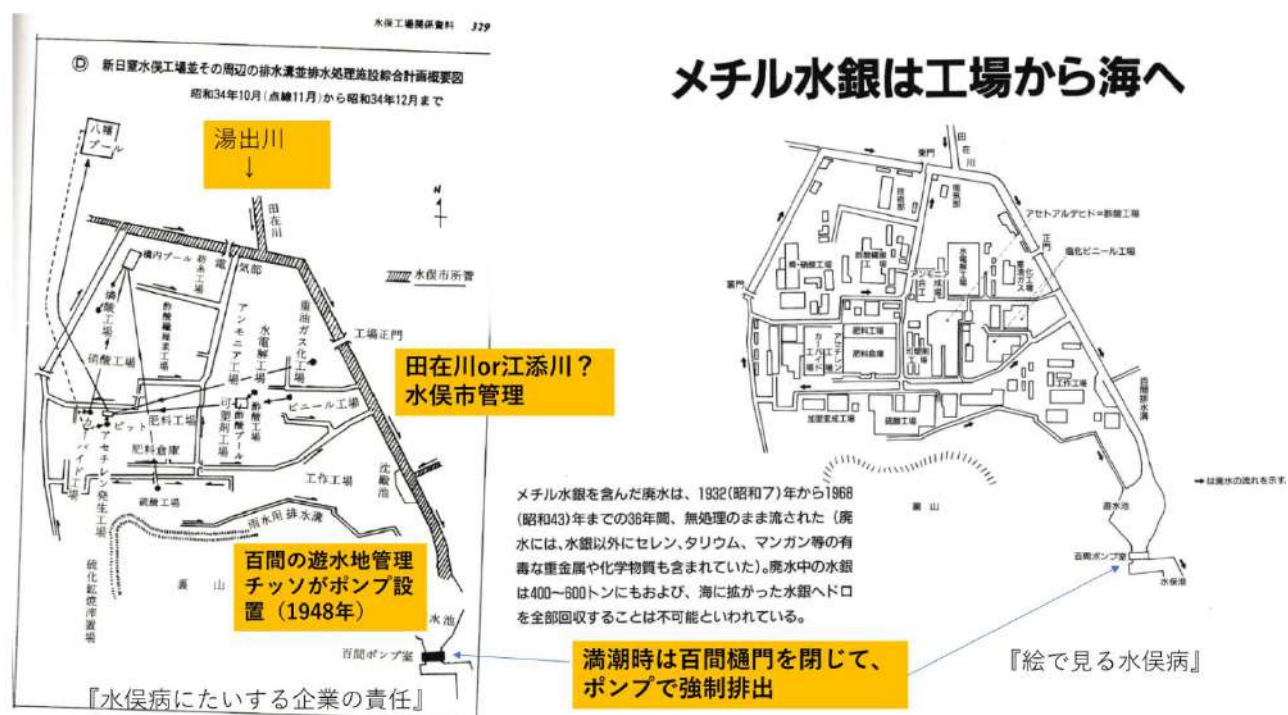


図Ⅲ-25 昭和 10 年から平成 17 年のチッソ工場



図Ⅲ-26 チッソ工場俯瞰図（昭和18年、鬼塚巖 作）

チッソ工場労働者であった鬼塚巖氏の作成した俯瞰図（図Ⅲ-26）を見ると、旧道とチッソ工場敷地側は、湿地、芦原、廃土、大粒塵捨場、屑鉄捨場、カーバイト沈殿ドベ、腰までツヌカルドロドロ湿地と明記されている。かつの水田がチッソ工場からの大量な有害廃棄物置き場と化していたことがわかる。その敷地を通して田在川が流れていたとも推察できる。戦後のチッソ工場の排水の流れは図Ⅲ-27に示してある。チッソは排水末端の百間排水口ではポンプ設置して管理をしていたが、そこに至る河川は田在川であり、その環境衛生管理者は水俣市と推察できることから、この当時の田在川の管理についての詳細な調査が必要となっている。

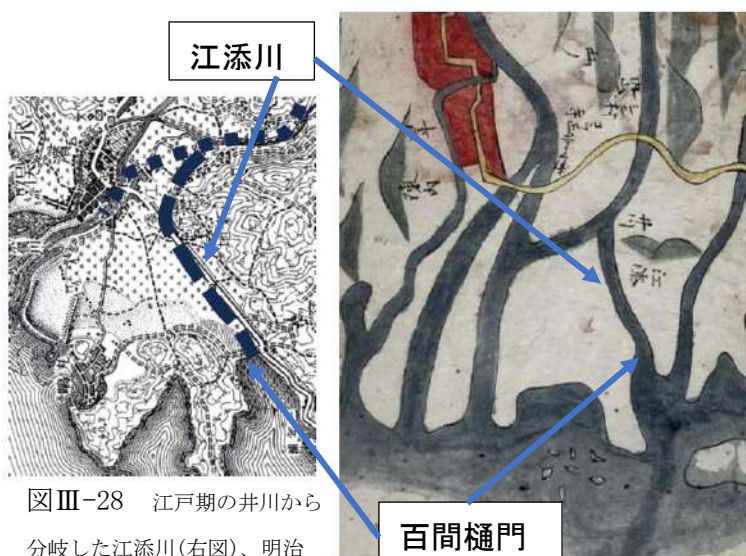


図Ⅲ-27 チッソ工場から、百間排水口に至る排水の流れ。昭和30年代。

2) 百間樋門に至る湯出川からの水系

百間樋門に至る水系は2系列ある。一つは、東側の江添川／田在川の水系（仮に「江添水系」という）であり、もう一つは百間樋門の陸地側の遊水地の西側の山麓沿いの水系である。この水系は塩田時代での潮溝とも推計され、丸島港の西入江につながる水系（仮に「丸島百間水系」という）と推計している。「江添水系」は、江戸期の塩田及び水田開発では、水田の用水・排水を兼ねた水系と推察できる。水俣駅とチッソ工場の間は水田であり、ぬかるみが多くあったという証言も多々ある。

図Ⅲ-24の右図は江戸期の図面であるが、湯出川から井川で分岐して江川沿いの河川が湾（百間港）に至ることを示し、江添川／田在川の元流といえる。この図には丸島百間水系は明記されていない。塩田も明記されていない。左図は明治34年の地図に推察した元流を描き込んだ。湯出川から井川の堰から分流した河川は、江添川と推察できる。個の箇所には現在堰があり、平町の住宅地から肥薩おれんじ鉄道線路下を通り、桜井町を経てベスト電器前を左に折れてチッソ工場前の田在川に至り、百間排水口に流れ込む。井川からの取水による水利権の約半分？はチッソが所有している。



図Ⅲ-28 江戸期の井川から分岐した江添川(右図)、明治34年地図に重ねた江添川



写真Ⅲ-9 湯出川の井川堰



写真Ⅲ-10 平の市街地内水路



写真Ⅲ-11 住宅と畑地の水路



写真Ⅲ-12 宅地横の水路



写真Ⅲ-13 桜井町の道路下水路



写真Ⅲ-14 正面はチッソ工場



写真Ⅲ-15 チッソ工場横の水路

3) 塩田時代からの丸島港から百間樋門に至る潮溝の水系

先に塩田の時の西側の潮溝について考察した際に述べた、丸島港の西の入江からの水路を現地調査した。丸島神社辺りまでは水路が確認できるが、その先は地中に水路が潜り込み確認ができない。チッソ工場の敷地の西側の山麓沿いに水路はあると推察できる。かつての百間樋門の内側の湿地帯はチッソにより埋立されている。一部、百間排水口に近い箇所は、チッソ工場からの排水路となって百間排水口に至る。



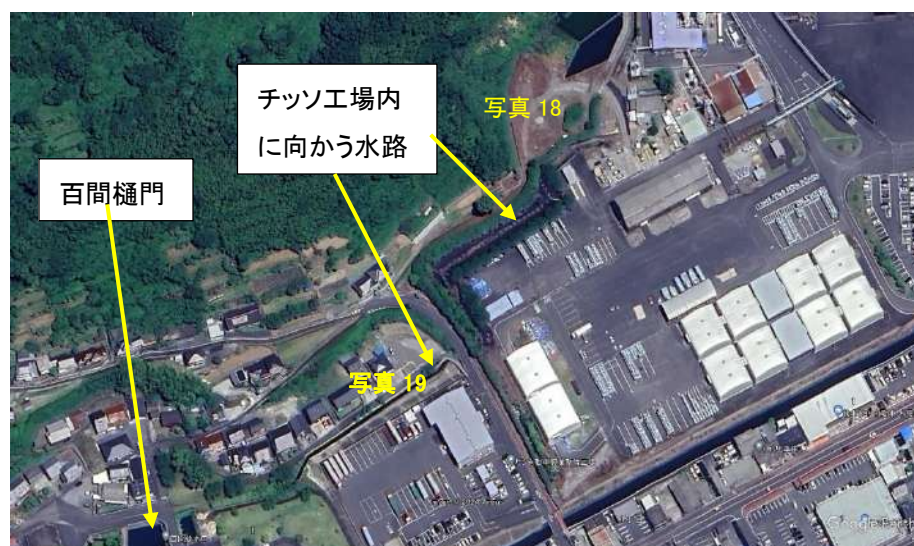
写真Ⅲ-16 丸島港の入江



写真Ⅲ-17 入江の奥の水路



写真Ⅲ-18 チッソ工場の西側、かつての湿地は埋立られる



写真Ⅲ-19 チッソ工場地から百間排水口に向かう水路。かつては湿地帯。左側のサン自動車整備工場地は埋立で造成された敷地

図Ⅲ-29 百間樋門からチッソ工場内の水路

(6) 樋門の機能について

百間樋門の機能は、江戸時代の塩田及び水田での干拓地の土地利用の時と、産業近代化で明治末期からチッソ工場が造成され、化学製品が製造されてきた時代とでは大きな転換があった。江戸期～明治期においては、塩田用の海水を取り入れ、水田からの排水機能である。塩田にとっては海の幸（塩分を含んだ豊穡の水）の取り入れ口であり、幸の入り口であった。耕地が少ない水俣の民にとっては貴重な生活の糧となる海水の取り入れ口であった。その後、製塩統制により塩田が廃止となり、塩田は水田・畑への転換さらに、チッソ工場敷地への転売転換となった。その結果として、海水の取り入れ口としての樋門は、チッソ工場やその他の工場・生活雑排水の排水口となった。豊穡の海水の取り入れ口ではなく、海を汚す、海水を汚す玄関口となったといえる。通常的生活雑排水であれば海の浄化能力に期待できたであろう。しかし、有機水銀を含む有毒化学物質を浄化する能力は海、海水にはなく、豊穡な海の幸の魚介類に有毒化学物質は蓄積され、結果として人間に濃縮された。水俣病の発症である。有機水銀の排出は1932年から継続されていた。

以上のように、百間塘の下に設置された百間樋門の機能転換は甚大な被害を及ぼした。百間樋門・百間排水口が近代産業化による公害の先駆けとしての水俣病の発症の原点である意味は、このように、この場所の歴史的な変化を十分に理解することでより深まるといえる。チッソ工場は砂漠に建設されたわけではなく、水俣の

民が江戸期から苦勞して干拓し塩田として造成してきたその構造物を、そっくりチッソが買収しその基盤の上に近代産業化を果たし、結果として甚大な人的被害を出した。独の哲学者のマルティン・ハイデッガーは、現代技術とは総駆り立て体制であるといった。まさに、チッソが水俣のかつての塩田地に行ってきた近代産業化技術は、この場所の歴史的基盤、水、人（労働者）、社会制度の総駆り立て体制を構築したものと理解できる。「チッソ城下町と水俣病」と意味はこのように理解することでより深まる。

樋門は塩田時代には豊穡の海の取り入れ口であったが、近代産業化により有毒化学物質を海に吐き出し海の豊穡を殺す出口となった。

表Ⅲ-6 樋門の機能転換

百間樋門の扉の機能（塩田用取水と水田用排水）		
①塩田のため＝満潮時までに開き潮水を入れ、閉じ潮溝に海水を満たす		
②田畑（生活排水）のため＝満潮時までに閉じ、海水の侵入を防ぐ。干潮時に開き排水する		
塩田の有無	樋門（井樋）	樋門の扉を閉じる目的
塩田 江戸期	海水の取り入れ口（満潮時） 水田・雨水・生活の排水の出口	塩田の潮廻しへの海水確保（海水→製塩）
塩田廃止 近代	農業・生活・工場からの汚水の出口	海水流入の防止（陸からの排水はポンプで強制）

(7) 樋門と扉の保存・蘇生について

1) 百間樋門の扉の蘇生

老朽化が進んだという理由で撤去され補管されている百間樋門の扉を今後どのようにするのが今、問われている。多様な考え方があろう。①扉はなくす、②より耐久性のある扉に付け替える（木製扉にこだわらない）、③チッソが有機水銀を排出していた時と同様な扉（木製）として復元・蘇生する。③が望ましいと考える。水俣病の激震地として、永続的に水俣病の甚大な公害を体感的にも理解する場として持続的な蘇生の方法であると考え。木造により経年劣化に関しては、伊勢神宮の「式年遷宮」のように、20～30 年間隔で木製扉への交換を行い、持続的に水俣病の原点を見つめ直す機会とすることができる。浚渫された水銀土砂で海を埋立て造成されたエコパークであるが、埋め立てた水銀へドロ土砂と海との遮蔽壁の耐久性は 50 年程度と言われる。このエリアには日奈久断層帯（八代海区间）があり、マグニチュード 7.3 程度が 30 年以内に発生する確率は 0～16%の S ランクに相当し、全国でも最も切迫度が高いとも言われている。いつ、水銀汚染が不知火海を襲うかのリスクを抱えたままのエリアでもあり、徹底的な分別除去の方策の検討実施を含めて、継続的に水銀汚染の課題を考える象徴的なものとすべきである。

2) 百間樋門の石橋の可能性について

資料 1 でも述べたように、歴史的に塩田のために、百間樋門は百間塘の下に設置された樋門である。江戸期の石工技術は不知火海で盛んであり、水俣市には 9 つの石橋が文化財として保存されている。塘の下の樋門は、橋の機能を果たす。従って、江戸期に開発された時には、石橋として開発されていたと推察できる。その後、明治末期に塩田が廃止されたが、水田用の排水樋門としての役割は継続し、その後チッソ工場排水口とし



写真図Ⅲ-20、21 百間樋門の 4 連アーチ、樋門のトンネル内は金属版？で被覆されているが、その内部が石積みの可能性もある。

て機能したことは先に述べた。明治以降改築されてきた経緯はあるとしても、また、1999年に大規模改修をした背景はあるとしても、現在の百間樋門の構造が石積みである可能性は高いと推察する。先に述べたように大廻塘の擁壁は、昭和時代の調査でも石積みであることは明確である。残念ながら大廻塘の樋門の発見はまだできていないが、石積み護岸と連結した石積み樋門であるとも推察できる。これらの点からも、百間樋門の構造を調査することが必要である。

3) 丸島樋門の構造

大廻塘の下の2つの樋門の構造については、先に述べたように石積みの可能性は高いが、現在、その場所を特定できない。大廻塘と連結している現在の丸島樋門は江戸期の塩田時代には存在していないと思われる。現在の樋門（厳密には排水口）は明治期以後の建造も推察できる。アーチ状のコンクリート造に見えるが、調査した石積みかどうかの特定も必要である。丸島樋門の満潮時の排水口となっている袖の水路の構造は石積みであるので、樋門も石積みの可能性も考えられる。

4) 樋門の文化財価値

写真Ⅲ－22は、八代市にある旧郡築新地甲号樋門であり、近年国指定重要文化財に登録された。明治33年に干拓地「郡築新地」に造設された樋門である。構造は石造で、アーチ部は赤レンガ造であり、10連続アーチが特徴である。



写真Ⅲ－22 旧郡築新地甲号樋門（八代市・国指定重要文化財）

<https://ameblo.jp/com2-2-2/entry-12801379502.html>

百間樋門が石積みアーチ構造であれば、より文化財的価値は高いといえる。不知火海文化は石文化であり、それを象徴するものとして石橋樋門の価値を発信することが必要と考える。

(8) 百間樋門及び大廻塘の検査について

1) 百間樋門の非破壊検査について

百間樋門の構造を明確にするためには、非破壊検査を実施することを提案する。現在の4連のトンネル内を覆う素材を撤去して構造を確認するのが最も有効であるが、それがかなわない場合には非破壊検査での方法がある。X線診断、音波診断の方法か、トンネル天井にある穴からマイクロスコープを入れて天井隙間の撮影等が考えられる。是非、水俣市に文化財保存活用の視点から協力して欲しい。

2) 大廻塘の遊水地の腰壁調査

先に述べたように、大廻塘の遊水地の腰壁は空石積みであることは確かである。この構造の確認と歴史的根拠を明確にする。江戸期の1790年代の石積みのままであれば貴重な文化財的作物といえ、百間樋門と合わせて文化財保存活用として整備していくことが求められる。

(9)「塩田→近代産業遺産」を世界文化遺産に

ここまで分析してきたように、チッソ工場が主に占有している場所は、江戸期の干拓、塩田、田の開発、それに関係する海水取水口の樋門、防潮堤としての塘が造成されてきた場所である。丸島樋門・大廻り塘、百間樋門・百間塘、四十間塘、塩釜神社、潮溝、潮だまり（遊水地）等である。不知火海における、干拓文化、石積み文化、塩田文化を基礎として、そのインフラ・基盤がその後の近代産業化により利用され、チッソという近代化産業の開発した現代技術が総駆り立て体制を構築し、このエリアの土、水、人、制度を全て総駆り立ててきた歴史であり、その結果として甚大な水俣病という甚大公害を発生されてきた。

水俣市水俣病関連遺産群は、江戸期干拓の1660年代から始まる360年の近世－近代－現代の海と陸のはざ間に産業・暮らし・命の世界文化遺産として非常に価値の高いものと評価できる。

以上の主旨を理解していただき、水俣市文化財保全活用地域計画において、水俣市水俣病関連遺産群を明記し、その発掘と価値づけを市民とともにやり、文化財として保全と活用の実践に取り組んでほしい。また、不知火海その他の地域の人たちとも連動し、日本の他の公害地域の先頭に立って活動する意義は非常に高いといえる。

補足 「水俣市水俣病関連遺跡の資料作成」に関して残された課題（第1集の追記修正として）

下記の資料の入手と調査が今後必要である。

- ①百間樋門・排水口、百間港の過去の様子のわかる写真、地図、文献等の収集。市民の生活排水も流されていたことから、管理責任は当初から行政にもあることになる。市民の生活排水処理を一企業のチッソに頼っていたということになるが、管理の経緯が明確になる資料の入手が必要である。この点は、百間水路～丸島水路においても同様であり、現在江添川、田在川の河川の管理と不可分である。
- ②百間塘、百間樋門及び、百間港に面するその他の排水口の歴史的変化と改築時の資料が必要である。
- ③江戸期における塩づくりの形式の解明と合わせて、百間塘、大廻り塘、潮廻りの機能と構造を明確にする調査が必要である。一部発掘も含めて埋蔵文化財として調査研究が必要である。
- ④丸島樋門の歴史、樋門の大規模な改修の資料。大廻りの塘とその横の遊水地の利用と管理の歴史の資料。
- ⑤チッソの排水処理に関するチッソの保存している工場排水計画に関連する資料が必要である。
- ⑥八幡プール（2か所、水俣川河口の手前と1970年代の埋め立て）の歴史と整備状況の資料
- ⑦チッソのカーバイト関連の廃棄物の埋め立て地の箇所と歴史、現在の汚染度合調査結果資料
- ⑧明治から昭和に至る、耕地整理と農業用排水路、堰に関する資料
- ⑨この水俣市水俣病関連遺跡群第一集の資料には、現在のリストから漏れているものも多々あるので、今後の補充を行う予定であり、かつ、地域計画においても補充していくことが求められる。

【参考文献】（第1集に掲載した参考文献は除く）

- ・『熊本県水産試験場報告』第1号、熊本県水産試験場、1902年
- ・『大日本塩業全書 第二編』専売局、1907年
- ・柳田国男編『山村生活の研究』民間伝承の会、1938年
- ・日本塩業大系編集委員会編『日本塩業大系 特論民俗』日本専売公社、1977年
- ・『水俣の啓示上・下』筑摩書房、1983年
- ・『日本歴史地名大系 第44巻（熊本県の地名）』平凡社、1985年
- ・広山堯道『塩の日本史』雄山閣出版、1990年
- ・『新 水俣市史 民俗・人物編』水俣市、1991年
- ・水俣病研究会編『水俣病事件資料集 下』葦書房、1996年
- ・『水俣病小史 増補版』熊本日日新聞社、2008年
- ・熊本大学文学部附属永青文庫研究センター編『細川家文書 絵図・地図・指図編2』吉川弘文、2013年
- ・崇城大学図書館編集『崇城大学図書館所蔵肥後干拓資料(軸物)調査報告書』崇城大学図書館、2015年
- ・矢野治世美「史料でみる近世の水俣——色川大吉「不知火海民衆史」への疑問から」『部落解放研究くまもと』(76)、2018年
- ・『ガイドブック 水俣病を学ぶ、水俣の歩き方 新版』熊本日日新聞社、2024年

【WEB情報】（第1集に掲載したWEB情報は除く）

- ・水俣市文化財保全活用計画資料／
https://www.city.minamata.lg.jp/kiiji0033705/3_3705_18315_up_5gmc57zv.pdf
- ・Minamata Tenaga Mategata shin shiohama, tomode hidariya ishigaki rangui deki ezu（水俣手永馬刀潟新塩浜、塘手左屋石垣乱杭出来繪圖）1667年。
<https://www.loc.gov/resource/g7964m.ct011350/?r=-0.132,0.239,1.175,0.461,0。米国>
- ・旧郡築新地甲号樋門（八代市・国指定重要文化財）
<https://ameblo.jp/com2-2-2/entry-12801379502.html>

水俣市水俣病関連遺跡群に関する資料(第2集)の作成に関与したメンバー

水俣の歴史的遺構（跡）残す会の資料作成メンバー

加藤タケ子 山下善寛 坂本龍虹 高木実 松永幸一郎 中山裕二

元島市朗 関根浩 小島憲二郎 西川大 佐野良介 （順不同）

資料作成専門アドバイザー

糸長浩司（元日本大学教授、NPO法人エコロジー・アーキスケープ理事長、建築学・地域計画学）

矢野治世美（熊本学園大学准教授、前近代史）

丹波博紀（大正大学専任講師、倫理思想史・人間学）